片

2
0
2
1

u_

八月

陽に溺れようよ
また喜びが心悩ませてくれるように
常の行いなどを取り零さない限りで
仲間を忘れたのはもう何時だっけ
沢に身を滑らせて河を渡った影は
戻れないならせめて答えて欲しい
月日が働くのは若草を枯らしたいから
生まれたばかりの泉を引き裂きたいから
跳ねる骨の痛みの行方を塞ぐ為じゃないよね
流れを遮る岩を皮を剥ぐように東風が砕いて
その寒けに背を向けようなら薄い笑みも零す

顔の冷たい旅姿の見知らぬ子を怖がらせた
朝からの煌めきを運んだ時に呑まれようよ
二〇二一年八月二十一日

何時もの細長い窓を覗きたくて
腹を満たした烏の群れさえ堕とす
白い空を真似て曲がる溝を跨いだっけ
眠りを忘れ誰も目覚めに目覚めれば
覗き見のこの身ばかりは微睡む硬い夢
窓の中で石頭の蓋が叩き割られ
嬉しさに割れ目の奥を更に覗くと
重い音が黒い誘い水と漣を立て
舐めたい程に固く瞑る目の直ぐ裏で
そのさざめく響きは屍の色だけは拒み
音の水を重く角張る塊と映し見なければと
窓を透かして

死んだ夢への目覚めを覗き返す

二〇二一年八月二十二日

何をも巻き取る力に魅入られ
骸は自らを笑う為に黙る
逢えるまでを待って払い除けた
船の着く知らせを遣り過ごした幼い悪戯は
ちゃんと決められた箱に仕舞わないと
散らかした儘では黙る為にも笑えなくなろうね
何一つさっぱり懐かしくないのが今懐かしい
こんな懐かしくなさの懐かしさなんて
産まれる前からだって初めてだから
身に着けられるのは安らいに勝ち誇る
高みの慈しみの声の残した匂いだけ
それとも已まない暗い雨を着込むように
遠く翳む低い闇のぼやけた惨めさを慰めてようか

眼差しの温かさをそれへと惜しむ事なく伝え流そう
そうして今更に笑うも黙るも柔らかい玉と混ぜっ返し
目新しいそんな悪戯に恥じらえる楽しみったら
二〇二一年八月二十三日

風を名乗って
それとも風をなぞって
謎を名乗って
それとも謎をなぞって
その謎を風になぞれば
謎の名は打ち消せるけれど
そんな君って
誰に寄り添われてるのかな
その誰かが風の名を奪ったのは何故？
ほら　そんな
名乗れない謎が逃げて行く

でもそっちはコソコソするにも狭過ぎて
風を運んだ道さえ塞いでは
謎は苦し紛れにその誰かを名乗って
その名乗られた誰かの後ろへ隠れようね
でも明かされた名を奪えるかな
君は謎に寄り添われたくて
誰かの名を打ち消そうとするばかり
だって君って
なぞられるだけの謎の名だものね
二〇二一年八月二十四日

その年に限り一日も欠けなかった筈です
でもよくよく思い出してみると
蜜の色で溢れてた日とか
竿に吊されてた日とか
土の匂いに烟ってただけの日とか有って

日の欠けを
そんなあれこれで埋めてたのかも知れません
次の日には時が勇んで走り回り
酷く忙しそうで
欠けた昨日を取り戻そうとしてたみたいです
でももっとよくよく思い出してみると
来る日も来る日も　どの一日も
欠けた昨日を隠そうと
まだ有るか無いかも知れないのに
少しの欠けもなく満たされた
確かに有る今日の振りをしてみせて
予め失われてたかも知れない時に
次から次へと蓋をしてたようでもあります
二〇二一年八月二十五日

路は縦と縦と縦と横と横とで

でもそれじゃ通じて行けない
縫うように引かれた斜めの路が縦と横を繋ぐ
かのようで　縦にも横にも絡まない
そっぽを向く為だけの斜めかな
そのせいで
重なり合う縦と横は入り組んで擦れ合えば
路の交わりは俄に立ち上がるように脹れに脹れ
成るようにしか成らないって
その度に繰り返し艶めく玉の片割れに圧し嵌められたようで
それでもちゃんと
水そっくりに溶けた骨などを
流さなくちゃいけないのなら流してる筈
でも斜めの路は途切れ途切れかに　乾いて罅割れ
縦と横の隙間を押し広げ
捩れて　もっと捩れたそうで
見す見すその斜めのさせるに任せるのは
孰れ斜めは綻びて裂け
刃のように　脹れ過ぎた縦をも横をも破って

玉の奥に隠れて埋まってる
真ん丸な光る骨を歓びに痺れて掘り出せようから
なんて望みを繋いでる内に
斜めは硬く細く縦と横の内にも外にも蔓延って
縦と横の路の交わりをギシギシと縛り上げれば
水そっくりに溶けた骨の流れなども
激しく詰まって　限り限りまで強張る
かのようで　路の事なんて望みと共に失せれば
光る骨の尖った欠片が一つ
縦にばかり棘棘と同じ処を鋭く舞って
それに恐れ戦く流れを
ぶつ切りにして先のない暗い横へ横へと
凍らせてるだけなんだけどね
二〇二一年八月二十六日

唇を歌わせるのは

爪先立ちの黙（だんま）りだって
歌は身を滅ぼすには欠かせないのを忘れない
あの惨めに物を乞う私の姿を
命の匂いを吹き払う風から守って居よう
勇ましくも陽に震えて凍る土が掘り返されれ
長い息にだらしなく脹らむ儘の乾く喉は
草の根を腐らせたような屍の香りに悶え
痺れて涎に塗れる下唇は
それでも途切れない土より重そうな粘る声を
ボトボトと首筋から胸に伝わせるけれど
唇を歌わせたのは
あの惨めに命を乞う私の知らない私の姿を跪かせる
惨（むご）い春の息吹だって言い触らせたら
屍を香らせる凍る土にも草の花など咲かせられようか
あぁでも　だから
そんな事が身を滅ぼすとしか歌えないんだ
ほんの一時の
そんな歌が好きだったな

だなんて過ぎた時に襲われて
冷たく息絶えたい身を次次に愛おしむ
そんな見知らぬお前こそ
種種の花を屍の匂いと集めて愉しむ春の息吹だって
二〇二一年八月二十七日

音の跡を辿る振りをしてみよう
愉しみが覆われてると思えば楽しい
覆いは消えた音の上を延びて滑る
孰れは生の音の弾けるのに辿り着けそうに
それを妨げようと
湿った時が硬く毳立てば
覆いは却って剥がれ掛け
で音と愉しみが顕わになるでもないけれど
忘れられた時の底に浮く小石に閉ざされた
数え切れない虫達が羽音を聞かせたそうに

それぞれに鳥の顔を造って競って啼くかの声なら
毳立って途切れ途切れの時の
そうして粒粒と光り始める其処彼処に
卵の殻を突（つつ）き割るように囁かれ
それは覆いの剥がれを滑らかに濡らし
時の刻みさえそっと艶めかせる
その深く透ける中に
音と愉しみが入り乱れて騒いでるのを
凝っと息を潜めさえすれば鮮やかに見て取れよう
でも　それっきり
時を止めたような静けさに
音も愉しみもきっぱり拒まれ拒まれる程に
音の跡が遡られては壊される音は幾重にも高鳴り
潜んでた息もハーハー荒れて根絶やしかな
そんな静けさの喧（かまびす）しく慌ただしいのには抗えないよ
二〇二一年八月二十八日

疵一つない真っ直ぐな泉を探して来る係りをさせられる
何の巡り合わせか
それが災いの元だって知ったのは
皮を剥がれ逆さ吊りの男を
手ぶらの帰りに見てしまったからで
その酷い眺めに汚された目は
どう濯いでも濁るばかりだけれど
それから求められてる泉なんて何処にでも見付かって
その探す係りも解かれた替わりに
水浸しを収める係りをさせられる
何の巡り合わせも
それが災いの元だって知ったのは
皮を剥がれ逆さ吊りの泉を
手ぶらの帰りに見てしまったからで
至る処で抑えが利かず激しく落ちる水が
泥と腐った魚の臭いの渦巻く海に叩き付けられ
その酷い眺めに汚された目は

どう濯いでも濁るばかりで
この流れに乗ってる限り何時まで経っても
痛い程にこの眺めに目を凝らしてるしかないって
こんなの余っ程打って変わって
死ぬまで安らかに続く穏やかな幸せでしか償えないよ
にしろ
何の巡り合わせか
だって確か
逆さ吊りの皮を剥がれた男は
目もしっかり刳り貫かれてたもんな
そんな幸せで疾っくに償えてたんだよ
酷いとそれを眺める目が災いの元と知れたって
汚れはどう濯いでも落とせずに
そんな酷さを幸せで償えた男に目を凝らすしかないにしろ
男は疾っくに藻屑だし
水浸しを収める係りも解かれないんじゃ
泥と腐った魚の臭いの渦巻く海に今に溺れようね
だったら　もう楽しくも安らかに

そんな穏やかな幸せで償えてるなんてどうかな
二〇二一年八月二十九日

何処へも行けないあなたよ
もう何処へも還れなくてはね
投げられる限りの花は投げたけれど
還れない行く先を定めただけ
あなたの額が花に導かれるなら
その定めの通りにあなたは行けようけれど
行き着く先はまだ何処でもなくて
ならば
ほら　熟れた実を幾つも添えましょうとも
色でも香りでもない
あなたの身にそっくりな
その重たげな脹らみが届くなら
ふっくらと　そこは

すっかりあなた一人を迎える処
華やぐ甘みを共に味わい分かつのは
初めて出逢う
あなたも知らないもう一人のあなた
そんな新しさへなら
実を贈った私も一時限り新しく贈られて
そんな私なら
あなたを迎える人だって喜べましょうとも
二〇二一年八月三十日

広い河が幅を拡げ続ける
親の古里で教わったっけ
あれは何の慣わしだったろう
何を数えてるか分からなくなるまで
数を数え続けては
何を数えてたか思い出せないまでは

この身には何も起こらないと
しっかり心を固める事
それとも慣わし程でもなく
何を数えても
数えるのを已められない儘に
何を数えてるか分からなってしまうとか
それでも数え続ければ自ずと心も固まろう
先に逝くのは必ず余所の誰かで
数えられるのは専ら彼らの消え入る息さ
間違ってこの息がそれに数えられそうなら
先にこの世の全てをフッと消し去って遣れ
そんな息だって吐けるんだ
心を固めるって　そんな事
でも固められた心なんて骸みたいで
見掛けは石かに脹れようと一皮剥けば
泡程に軽そうな砂を尽きせず零し出してよう
親の里が辛うじて河に流されないのは
やっぱり

里人のそんな慣わしのせいだったかな
二〇二一年八月三十一日

九月

風が毀れて行くのを見たよ
それとも握り締めた煌めく硬い塊を
それが見る見る脹れるのをどうしようかって
あぁ楽しくて笑いが込み上げる
空から投げ下ろすみたいに叩き付け
でもそれはすっかり斜めに
月の湿った匂いの漂う並木の脇を滑って
東から少し北を向いてゆるゆると
粉粉に砕け散って行くのを見たんだ

なんて思えてしまった事なんて有ったっけ
そんな憶えもあやふやな儘に
再び還って来ないあの夜
東から少し北を向いて走って行く影は
いそいそと細い足を草原に踏み込ませ
砕け散ってもまたそこで一つに収まって転がる
ぴったりの衣を纏って姿を直隠してよう
月の重みをすっかり接いで身動き取れない
風の一塊を探し回ってたんだけれど
草原は抜け岩肌を駆け上ると
はためく衣を纏った風が獣に姿を変えたかに
だだっ広く延びる低い岩陰を当てもなく走り廻ってる
きっと毀れるばかりじゃ済まないんだ
さっさと誰かに捕まって打ちのめされて
血を一息に抜き取って欲しそうに
二〇二一年九月一日

すっかり頭と体とで時を掛けて
全てを一つに見るって覚えたんだ
なので臭い息を殺すのは慣れたものさ
鉄に隙なく囲まれた中にすっぽり腰を据え
空っぽな火を正しく飛ばす路を描こうと
渦を切っては巧みに繋いで行く
細やかは手付きは滑らかで少しも震えない
その火でぴたりと火を裂かなければならないから
先ずはその　他には何も出来ないのが傷ましかろう
その傷ましさを振り撒こうって事なんだけれど
渦の切り貼りが狂いなく極まれば
その締め括りは何時も通りの
少し俯いて見事な知らん顔
その為に息も殺し慣らし
火を思う様操れるんだから
限られる言葉数で取り敢えず
その火の空っぽなのを認めた後は

臭さが癖になった黙って食う飯はさぞ旨かろう
そんな事を遠く思い描く
烈しい火の跡で疲れ果てた玩具を拾い上げる男は
飛び散った儘の傷ましさの傷ましく入り組んだ様を
目だけの力で一つに見なければならない
二〇二一年九月二日

乾いた路が悪くては悪い足が縺れ
踏まれた草まで縺れに縺れ
堪らず石を泳がせたくなる
だって足を生やした石だから
なんて如何にもな後付けだろうに
蔓に絡まれるそんな弱腰の煌めきに魅入られたか
葉裏に潜んでたにしては肉厚な虫みたいな奴が
体を触りに来るのは撥ね除けたは良いけれど
誰だっけ？

馴れ馴れしいけれど知り合いでもないよな
もう冷たくなってるなら抱え上げ
その折られた腰こそ一際煌めけば
キラキラ中から聞こえるのは種の音だろうに
外へ出られない儘では孰れ息の根も止まろう
なので足を生やした石で
なんて如何にもな後付けだろうと
弱腰はまた煌いて粘粘と転げて行く
汗掻く一人は黙り込み
冷たい一人は喧しくては愈愈絡まって
肉厚な屍と二人で縺れ合う儘は良いけれど
見えない先ばかりが見えに見える先を
先へ先へ泳いでしか石で居られないなら
何時かたっぷり脹れた屍の腹を擦り破り
月影も差さない水の上へ撒き散らせようか
それがまだ息の有る種共ならキラキラと
闇の海を先へ先へと追い払う危うい波に乗る
そのまた先へなら種は破れて次次芽吹き

やっと黙り込まされた跡が沈んだ色に引かれ
足を生やした石の煌めきなど嘘と忘れ去られ
伸びる茎は暗い己を触り捲るみたいな花の姿を追うけれど
闇を裂かなければ咲けはしない石の花とは知れようか
二〇二一年九月三日

草を踏んで
踏んでは踏んで
葉を少しも折らずに浅く踊るなら
翼でも生やしてるかって間違えて
踊りながら浅い身を目の中でトロトロと弄び
醒め切れない泥濘の重みが唇にトロリと伝わろう
そんな何処へも行き着けない遠回しな言い回しは
目の回るのを真似ては舌を巻いては回し直し
そんな事で寝床を捻曲げて拗らせて寝た切りで
ひたすら謎を口走る周りの人達の手を煩わせてるけれど

どれも翼の謎ならすっきり答えてあげよう
なんて落ち着いた目付きに憧れてどうしよう
浅い身を破る積もりで息絶えた振りで目を回そう
そんな裂け目なら岩壁にうとうとと幾つも開いて
どれも真ん中な真ん中へとうっとりと繋がってる
そこに見付かるのは
浅いながらに踊り続ける為になくてはならない
踏ん付けられそうなら踏ん付けたくて踏ん付けられない
一握りの崩れるだけ崩れた酷く柔らかい土塊に違いないよ
もう翼の謎を転がす唇はすっかり紫と危うい
土塊踏ん付けごっこみたいな踊りなら
疾っくに息絶えたのをムキになって隠そうと舞い飛ぶように
枯らしたくない木ばかりを巡るしかなさそうかな
根元に疾っくに埋められた翼を恋しがるかに
二〇二一年九月四日

消しちゃいけないよ
消せないよ
じゃ
火を治さなくちゃいけないね
難しいな
だって難しい火だから
治すのを諦めれば
難しくなくなるでもなく
ひょっとしてもっと難しくなりそうなら
諦めちゃいけないけれど難しくて
危ないな
そんな難しいのって
危ない火なんじゃないけれど
なので治すのが難しくて
だけど危ない火なら治せるかって
ひょっとしてもっと難しくなりそうなら
火を治さなくちゃいけないなんて
危ないせいで諦めようにも

難しいな
だけどそれ
難しい火なんかじゃないけれど
だって危ないのが難しいだけだから
危ないな
そんなで諦めちゃって難しくなくすなんて
なので諦めるのって難しいのかな
その難しいのが危なくて
その危ないせいで治さなくちゃいけない
そんな消しちゃいけない消せない火にしたってね
二〇二一年九月五日

独りぼっちでもない癖に
木登りにでも誘（いざな）われるかして
うっかり高くから
遠くなんて眺めちゃいけないよ

もう君は
何処からだって眺められ
遠くからばかりとは限らないよ
おっと　だったら近くからが危ないかな
なんて怖い遠くから目を逸らせば
もう君は
どんなか知れない遠くから
眺められてようと知りようもなく
君を眺める遠くに襲われてようね
そうなりゃ遠くも近くも同じ事で
もう君は
身動き一つ取れなくて
なら身動きなんて要らなくて
遠くさえ眺めてりゃ済みそうだけれど
そんな眺められる遠くなんて見付からず
もう君は
どんなか知れない遠くを眺めたばかりに
どんなか知れない君を至る処から眺める

どんなか知れない遠くに攫われて
そしたら眺められてるでもなくなって
もう君は
独りぼっちになりたくても囚われた儘で
そんな独りぼっちじゃ何も出来なくて
なら誰かに頼んで独りぼっちにして貰っても
それ　独りぼっちじゃないし
二〇二一年九月六日

少しずつ目を醒ましたりするから目を傷めるんだよ
それで慌てて目を瞑ったりするからもっと傷めるんだよ
そんな傷めるだけ傷めた目でなら
さぞかし何だって見て取れようね
いっそそんな目なら潰してしまおうか
そしたら何を見ようともしなくたって
見えないものだって見えに見えて

そんな見えるも見えないも
すっかり忘れようとしたくなって
だけど何で忘れなくちゃいけないのかな
なんて戸惑いばかりを耐えてれば
そんな忘れるも忘れないも見えに見える幸せに
我を忘れて耐えるしかないにしても
目は潰れたって目なのさ　空っぽだから
見ようとしなくたって何だって見てしまうのさ
なんて
そんな忘れられた我さえ煽るような目じゃ
耐えるしかない幸せの嘘なんて直ぐに見抜き
見えるも見えないもすっ飛ばし
必ずすっ飛ばすしかないんだって明らかにしようね
そんな目をどうしたら潰せようか
なら潰さなくて構わないじゃないか
なんて嘘こそ疾っくに見抜かれてようし
二〇二一年九月七日

浜へ降りて
海を路って呼んでた頃
陸は穴って呼ばれてなかったっけ
それとも浜で真上へ耳を欹て
空の音だけを聴いて歓びについて考え巡らせた
その直に息絶えそうな考えを持ち帰れる
幾ら潮風に晒されても朽ちない家を探してたんだ
そんな家へ辿り着けない替わりに
穴は掘られるしかなく
その為の陸でしかなく
歓びについての考えの染みた血や骨を埋めたかったけれど
替わりに穴へ転がすのは何時も
鳥や鼠や頭だけの海蛇の屍に似た冷んやりした形の
浜で拾った掌程の刺刺した薄っぺらな石ばかり
そんな石で孰れ穴が満たされたらどうしよう
それはもう決めてあって穴なんてさっぱり忘れ

忘れたのを忘れない為に
穴を草の根の混じる土で覆って隠して杭を打ち込む
その通りに　打っても打っても幾らでも打ち込めて
深いって何かを初めて知れたっけ
また浜へ降りて
路って呼ぶ海にも深さがあって見付けた時
深さから立ち昇るように　それとも逃げるように
鳥や鼠や頭だけの海蛇の干涸らびた真上を向く顔が
海を食み出し空を破って次次に高くへ拡がって行ったっけ
それから海を路とは呼べなくなった
抑も浜へ降りて海を眺めたりもしてないし
陸はさっぱり消えて無くなって忘れられ
忘れたのを忘れない穴だけが残ったなんて
今は何時もそんな話しを
今でっち上げたばかりみたいな顔で呟いては
草の繁る杭への路を行ったり来たりしてる振り
二〇二一年九月八日

争いは嫌いだ
なので
罵りの言葉はどれも耳に優しく響くんだな
慈しみの言葉に狼狽えて拳を強く握ってしまう位なら
穢いもののように冷たく追い払われたいんだ
なんて思いに引き裂かれるのも嬉しい
薄くん硬い背中を傾け反らし
陽の届かない暗い流れに沈んで身を任せる
望んでそうしたからには益益俯いて
肉の塊共の間を柔らかく濡れた体で擦り抜ければ
筋金入りの悪い名で溢れてる何時ものの橋へ辿り着こうね
そこでは罵り叫ぶ声も慈しむ声も
風に乗って高い空へ塵と舞い散ってよう
じめじめと粘る囁き声ばかりが行き交い
殺し合う為に息をしてる奴らは息を潜め
それでも何か

呟かずには居られないようだが聞き分けられなくて
なので自ずと耳は愈愈澄まされ
もっと違った事が聞き分けられて行くけれど
行き着く先に待つのは何も違った事じゃない
それさえ分かれば面白いように聞こえ直される
行く末を正しく囁く声はくっきりと
水のように繋がって尽きないにしろ
殺し合いだけが楽しいのなら必ず隠さなくちゃいけないらしいよ
これっ切りな微笑みを促してそうにもね
二〇二一年九月九日

食べる物を間違えてるかな
死ねる物を食べるか
生きられる物を食べるべきなのに
どちらも遠過ぎて手に入らない
いんちきな物ばかり食べてる

なんて考えに殺されて行くんだ
でもいんちきなのはそんな考えで
いんちきな食べ物なんて一つもない
なんて考えもいんちきで
だって考える事を間違えてる
死ねる事を考えるか
生きられる事を考えるべきなのに
幾ら探してもそんな考えには辿り着けない
だって
考えるって事からして飛び抜けていんちきだから
そんな考えに殺されて行くんだ
だったら考えるのを已めれば良いのは明らかで
何時も考えから逃げられる処を探してるけれど
そんな考えからはぐれて仕舞えばもう
何の考えもなしに
迷子を捜し出したみたいに
死ねも生きも出来ない考えをしっかり手にして
殺されるのを偏にも安らかに待ち望んでる

何のいんちきもなくに
食べる物を間違えるしかなくに
二〇二一年九月十日

眺めを眺めるのから逃れられないからには
陽を失って白く輝く空に圧されて青ざめる草原へ来てしまう
必ず迷い込むように少しも迷わずに
それともそんな草原へ辿り着けなくても
必ず迷い込むように迷ったりもせずに
空の輝きが厳しく風を射抜く何処へなりと来てしまおう
だって何処だろうと孕むのは許されないから
眺められるなら眺めはもう脹れた腹を裂かれて息絶え
その斃れる眺めに孕まれてたからには産まれるしかない
なのでその
産まれ出るこの身の様を具に見詰められるんだ
眺められるならどんな眺めも

そんな殺されるしかない孕み女の腹でしかなく
一つ限りの穴の外へ拡げられる目が向けられるのも
孕むのを許されない眺めでしかなくて
その眺めに孕まれながら
その眺めを裂いて殺しながら
また産まれ直し直され続けるしかないなんて
そんな果てのなさに疲れ果てて斃れてないか
でもまた眺めを眺めてしまう
その眺めから産まれるばかりでは
殺される眺めに孕まれて産まれ続ける身に遅れて
何処を眺めようと
それを見詰め続ける目であるのも已められないかな
二〇二一年九月十一日

短いなら聞かなかった振り
長いなら聞いてないと同じ

長いような短いような話しの後が危ないね
話しの筋が分からなくなってようなら
きっともう決められた処へ連れて行かれてるよ
そんなのって笑っちゃいけないのが可笑し過ぎる
だって
決められた処なんて可笑しいに決まってるから
なんて心を緩めちゃいけないよ
だって
可笑しいに決まってるなんて抜かりないに決まってるから
その抜かりなさが間抜けに見えて可笑しいんだけれど
笑いを堪えたら負けさ
でも笑っちゃいけないんだから
ここが辛いところだね
その辛いところがまた可笑し過ぎるけれど危ないね
だって間抜けに見せてる間抜けなんて
そんなのには
それっ切り手も足も出せなくて
なのでそんなのって少しも可笑しくないからね

そんな少しも可笑しくないなんて
間抜けよりずっと傷ましいのが可笑し過ぎて
きっともう決められた処で間抜けな振りさえ出来ずに
でも話しの筋が分からないのなら
そうして居るしかなかろうし
二〇二一年九月十二日

石を投げれば
石は下から上へ飛ぶのだから
投げたら投げただけ
石は上へ積み上がって行こう
で
なぜ石が投げられ積まれるか
なんて話しはすっかり忘れられてなくちゃ
だって
木に吊されて雨風に晒された話しをしたいんだから

木は良い奴だよ
見上げてるだけでも分かってたけれど
吊されて骨身に染みて分かったね
なんて話しはすっかり忘れられてなくちゃ
だって
積まれた石の下に埋められた話しをしたいんだから
でも木は良い奴だよ
これは忘れちゃいけないね
骨身に染みてるから忘れようもないけれど
で
なぜ石の下から声を上げてるか
なんて話しはすっかり忘れられてて
いや抑も
声は誰の耳にも届いてなければ忘れられるもなくて
なので
石を投げれば
石は下から上へ飛ぶのだから
投げたら投げただけ

石は上へ積み上がって行こう
だって
忘れようのない話しは繰り返されなくちゃいけないから
埋められて埋められたとも忘れられたなら
投げられ積まれ已まない石に促されてるんだって声を上げて
二〇二一年九月十三日

それは伝えられた
それはそれに相応しい人にしか受け取れない　と
とは
何が伝えられたのだろう
それを疑えとだけ伝えられたのか
疑いは必ず争いを呼ぶなら
争えとだけ伝えられたのかも知れない
それもまた疑われるしかないなら
争いが争いを呼ぶ中へ進んで巻き込まれて行けと

伝えられたのだろう
ならもう何の疑いもなくそうするしかない
いや
そうするしかなくてこそ
疑いが疑いを疑って疑いは疑い尽きるも無さそうで
二〇二一年九月十四日

悲しむとか言うけれど
悲しんでるんじゃなく憎んでるんでしょ
ひたすら憎みたいんでしょ
でも憎み切れなくて
それが情けなくて堪らなくて
途切れてしまう憎しみをどうしようかって
どうにも出来ないのをまた憎んで
でも憎み切れなくて
ひたすら憎みたくても叶わなくて

その叶わないのなら憎しみの替わりに
悲しむでもしなきゃ居られないとか
喜ぶとか言うけれど
喜んでるんじゃなく憎んでるんでしょ
ひたすら憎みたいんでしょ
そうして憎んでられて
それが楽しくて堪らなくて
ずっと憎み続けられるのをどうしようかって
どうにも出来ないなら出来ないで
でも憎み切れなくて
ひたすら憎みたくても叶わなくて
その叶わないのなら憎しみの替わりに
笑いが込み上げるのを抑え切れないとか
でも
悲しませたり喜ばせたりする憎しみなんて知れてるさ
それよりその憎しみをこそ憎んで憎んで憎みたいんだよ
でもどう憎んで良いか知れなくて
憎み切れない憎しみなんてとことん嫌いになって

それでも憎んでなくちゃ居られないんだから
憎しみは何処から来るんだろうって
憎しみを嫌い続けて果てがないのが恐ろしいんだよ
憎しみさえ蝕んで他に恐ろしい事なんて無くなる程に
そんなで悲しむも喜ぶも
咎められたみたいに何処へかこそこそと逃げて行くよ
軽軽とそれは楽しそうに
二〇二一年九月十五日

ふと止められた時に守られるみたいに
息を潜めて凝っと耐えてられるのは楽しい
それより楽しい事なんて全て忘れてしまえるね
痛みに振り回される楽しみも遠い思い出で
ただ静かに耐えてさえ居れば
なまくらな恵みが蠢く中に溶けてられるようで
どの恵みも目を凝らすと小さく蜷局を巻き

その喜びを語りたそうに煌めいてる
そしたらもう溶けてるばかりじゃ済まなくて
他の恵みの先に立つように急いで尖って
こんな事を他の誰が目にしただろうって
その喜びを語らずには居られないけれど
なまくらな恵みがそれを許してくれない
それにじっと耐えてられるのも楽しく
益益恵みの中に溶けて行けてそうで
そしたら
語りたい事なんて嘘みたいに溶け
始めから語りたい事なんて無かったって知れれば
それを凝っと耐えるのがまた楽しく
小さく蠢いてた蜷局はすっかり溶けたかな
で始めから恵みなんて無かったって知れれば
凝っと耐えてられるのがすっかりなまくらで
そのなまくらなせいで
語りたい事なんて水が流れるように
幾らでも語れるけれど

語りたい事は無かったんじゃなかったたっけって
その楽しさなんてもう耐え難く
潜めてた息も止められた時を突き抜けてようね
そしたら
耐え難い楽しさだけが
何の楽しみも置き去りにするかに
切れ味鋭く蜷局を巻く一つ限りの大きな恵みの中に転げ落ち
きっと戻れないよ
置き去りにされた楽しみなんて一つも見付からず
そこに確かに語りたい事がドクドクと溢れては尽きない儘に
二〇二一年九月十六日

終わる積もりだったかどうか
でも途切れたからには始めなければならない
それは初めての始めか始め直しか
どちらにしろ先ずは布で覆わなければ始まらない

蜜を集めるのを已められなかったばかりに疲れ果て
再び陽の光りなんて見たくないのか
刺刺しい獣の皮を頭から被り
始めるのは身を滅ぼす為
いや始めるだけでもう身は滅びてよう
なら集めた蜜を火で炙って黒焦げにして
肌に塗り込んで行く
そいつはきっと男か女だろう
だったらこっちは男でも女でもないぞ
なんて決め付けて
硬い皮を被った木切れを噛んでは尖らせてる
こっちはそれだけの事だけれど
そいつは男か女かできっと大違いで
だったらどっちでも構わなくなるまで
そいつの体に木切れを突き刺し
穴を開けるだけ開けてやろう
穴と穴は繋がりに繋がって
そいつの体ごと一つの穴になれば

そこを通り抜けて終わりにしたい
どっちでも構わない男か女かどっちかが
終わりから産まれた肉の塊なら
幾らでも初めての始めを産んでやるぞみたいな顔で
こっちは重く湿った布を誇らかに引き剥がし
乾いた風に乗って飛び出して行く
二〇二一年九月十七日

蜜の灰を握り固めれば
高い陽に向けて投げなければならない
そうしてそこに透き通るのが見えるけれど
透き通ったのは陽なのか青空なのか風なのか
どれも違うなら
舞い散った蜜の灰の影が招いて陽に晒された
疾っくに過ぎた風を追って長く延びて行く
狭苦しそうな闇の尾っぽなんだろうな

それが巻きみたいに透けた輪を画き掛けるだけで
砂でギシギシと真っ黄色に回る大風が招かれる
そうか
水を求めて彷徨いたかったに違いない
だったら砂に埋もれるまで大風を突っ切りたいけれど
蜜の灰の混じる土の匂いを頼りに
闇の尾っぽの痕を黙り込んで這いずり回るしかない
そうして風にガタガタ震える身が輪を描き
その度に喉を焦がす渇きを一結びすれば
焼かれた蜜も償えようかって
二〇二一年九月十八日

黒い水を飲んでるから血もたっぷりと黒いんだな
白い水を背負ってるのは知ってても
喉が渇くと黒い水を探してしまう
白い水をすっかり忘れてしまう

でも
白黒が入れ替わる位に嬉しい思いをしたら
白い水を飲む事にしてたんだ
それも忘れて
喉が渇いて黒い水を探してると
黒白が入れ替わる位に込み上げる嬉しさに溺れ
あれよと言う間に白い水の底に沈んで黒い血を流してる
これはとても悲しく酷い話しなんだ
でもそれも忘れて
白い水は干上がって喉が渇くと
白い背負い水を　飲み干すまで貪らずにはいられない
それでどうやら血も白く流れる儘なようなら
黒い水も血も忘れてしまう
黒ってどんなだっかも忘れてしまう
背負い投げを喰らって
勝ち負けの全てを背負い込まされたみたいに白く
その白が真っ黒に入れ替わろうかと思えてならなくに
二〇二一年九月十九日

もうゴミを拾ってるよ
ゴミを拾おう！　は
勝ち負けの後の祭りの神の声か何かか
それともまさか
まだ祭りの続きが繰り広げられてるか
祭りとゴミ拾いは目眩く程に切り離され
なら目眩く処を間違えてるんだ
と言うか間違える処を間違えてるんだ
間違える処を目眩く程に間違えないとも言えるけれど
つまり
間違えなくちゃいけない処を間違えられないんだ
それが目眩いて堪らないんだ
違うの？
目眩く儘なら始めから間違えようもないだけなのに
目眩く先が間違えようもなく見えよう筈なのに

それが見えないのを目眩いてると見間違えて
これが酷い話しだともまるで見えなくに
だって神の声か何かだものね
いや違う
神の声か何かなんて疾っくに聞こえまくってようよ
なのに何故かそれが聞こえて来ないだけなんだ
その酷い処が目眩く程に見えて来ないだけなんだ
つまり
目眩く程に目眩く処へは間違っても行きたくないんだな
と言うかやっぱり間違える処を間違えてるんだ
その間違えようもなくきっちり間違えられないなら
もう何を間違えるもなく間違えるしかなくにね
神の声か何かなんて目眩く程に
間違いなく間違えよう！　しか言ってないのに
二〇二一年九月二十日

頭と体を入れ替えたいなら
皮を剥いで肉と腸（はらわた）を裏返して骨を逆さにしないとね
で頭が
剥がされた皮にすっかり包まれて肉ごと体からぶら下がったら
骨剥き出しの脚は風を硬く掴んでは鋭く蹴って走り
尖った青い山の頂の湖の真ん中に突き上がる
枝は落とした枯れ木の骨のように硬い太い幹を登り切って
青い空に突き刺さったみたいに逆立ちして
青に染みて何処までも拡がる山裾を逆さに見上げないとね
だってその為に体と頭を入れ替えたんだから
いや待てよ
頭をぶら下げた体で逆立ちしてるなら
頭が上で体が下で
少しも入れ替わってないじゃないか
青い山と青い空だって引っ繰り返しただけで
入れ替えられたでもないし
でも何も変わってない訳じゃない
青空に逆さに突き刺さってる骨剥き出しの脚で

山と空の青の境目へ踏み込んで行けてるよ
もう山も空も溶け
なら上も下もなく頭と体を入れ替えるもなく
入れ替えたいなら好きに入れ替えられてる積もりで
泳ぐように青の中を進んで行ける
な訳ないさ
だって骨剥き出しの腕は
幾ら痺れても硬い幹の先に辛うじて翳り付き
逆さの体は何時振り落とされるか知れないよ
それとも
枯れ木は疾っくに湖から根刮ぎにされ
硬い幹ごと青を突っ切って行けてるなら
翳される枯れ木が指し示して変わらない上と下とが
先へ先へ鋭く揺れては戻って
青の境目を引き裂いてるだろうけれど
そのどちらが上でどちらが下かは
皮に包まれ引き千切られそうに振り回されてる頭じゃ
まるで見通せなくて目でも回してるしかないかな

でもそうしたくてその為に
頭と体を入れ替えたかったんじゃなかったっけ
二〇二一年九月二十一日

産まれながらに私はずっと土を捏ねていた
と言ったその人の顔は
捏ねられた土とは似ても似つかない
長い時を掛けてギザギザの刃を斬り付けたようで
そうしてる内にも
土は降り止まない雨を含んで流れ落ち
遥か下に溜まらなければならない筈が
遥か下ごと底でも抜けたのか
何処までも土の赤い筋は引かれても
乾いて罅割れ
それに沿って細く分かれて吹く湿った風に濡れるなら
それは血の流れる他のものには見えないだろう

の他のものとは何だろう　と
その人の顔が振り向けられる先には
赤い輪を前と後ろに嵌めた空っぽな車の
背を向けて走り去る青ざめた眺めが薄く掠れる他にない
他にないなら車には戻って来て貰わなければならないよ
だってまるで何も無くなって仕舞おうから
長い時を掛けてギザギザの刃で斬り付けられたような声で
だからと言ってゴツゴツと強張る声ではなく
肉の裂け目のように滑らかで艶のある声なのだが
車なら戻って来いよぉと声を掛けるなら
戻りしな車は鋭い刃の独楽の回るようで
あぁこんな刃が顔を傷付けたんじゃない
そのまるで違うのに酷く傷付けられるようで
滑らかで艶のある声を掛け直したいけれど
声はもう独楽の回るような刃で血塗れで詰まってしまいそうで
でも血塗れな程に益益滑らかで艶のある声ならと
長い舌のように声はヌルヌルと顔の傷を愛おしく舐めている
それとも相変わらず湿った風が土を濡らしているのなら

顔も相変わらず
ギザギザの刃を斬り付けたようにも
滑らかで艶があって傷なんて一つも無いのかな
二〇二一年九月二十二日

孕まれるのは常に他のもので
自らを孕めはしない
その何ともならないのが何ともね
自らが自らを孕めたなら
自らは自ら孕んだ孕まれた自らを食べては
生きて行けるよね
食べられた孕まれた自らは
自らを孕む自らに食べられてれば孕み直されて
生き返ろうし
でもそんなの
無いものねだりなので産まなきゃ いけない訳で

その孕まれては産むしかない他のものなら
えっと　どうしよう
切り刻むでもしようか
腹の足しにもならないけれど少しは憂さは晴れそうだ
それで自らが殖えるでも減るでもなく
切り刻んだものを片付けるだけ煩わしいけれど
そんな煩わしさに煩わされないでは生きて行けそうにない
でも
そんなの繰り返してたって
他のものを孕むのからは逃れられないのから逃げてるだけ
それしかないならそれしかなくて何ともね
それとも孕むも産むも已めて始めから
有り余ろう心であれこれ謀を巡らしては
他のものをせっせと切り刻むのに時を費やしてれば
身軽に楽しくあちこち遠くまで行けそうかな
でも
それって自らを打ち棄てるのと何が違うんだろう
それとも違わなくても逃げてるだけなら同じかな

同じじゃちっとも楽しくないし何処へも行けてないし
望んでもないのにまたうっかり他のものを孕んでしまってるよ
二〇二一年九月二十三日

その草の花の名に思いを巡らす儘に
ついうとうとしてしまったからか
花の名を思い出せないにしても
花には名は無かったと思い出せたようでもあって
その替わりに草には必ず名が有る筈で
その草の名に息を吹き掛ければ
名は翼を尖らせ空へ舞って嵐を占えるにしても
抜け目なく確かな新しい花の名を持つ嵐の鋭い動きには
占いは易易と裏切られ
酷く乾いた風に薙ぎ倒される草は枯れ
残された花は冷えて冴えた色を煌めかせる
その花の色の名が嵐の花の名に微かにでも染み渡れば

二つの名は啀み合うのは明らかで
嵐の花の名は掠れて見る見る萎れ
草の名に息を吹き掛けて改めて嵐の行方を占えば
嵐は占いに渋渋従って抗う力もなく失せ
もう嵐の花の名には妨げられずに花の色の名を名乗る花が
その名だけで空を覆い尽くし
嵐から花の名を奪おうと企んでよう
でも空の向こうから嵐の花の名が
花の色の名を名乗る花の名を罵る声が響いて来て
それが微かである程にその禍禍しさに
花の色の名を名乗る花の名は慄き
その名を自ら消して行こうか
二〇二一年九月二十四日

嵐にも水涸れにも見舞われない穏やかな日なのに
何処に蹲ってるのかな

とか
嗤われるにも価しないかにも
嵐に仇を返されるのを怖がるかにも痩せ
お腹は土よりも暗いけれど
お尻は月よりも光ってるよね
水の用い方を知らないのかな
目の前の水溜まり一つで溺れ死ねように
それとも
根を腐らせて喘ぐ草の真似が楽しくて
その楽しさにねっとり心を添わせ絡ませれば
自らの毒が回ってのたうつ蛇が草の根かもね
葉茎に喘ぐように赤い筋が滲むのもそんな事かな
とか
嗤われるにも価しないかにも
水涸れを思い出すのを怖がるかにも痩せ
目の奥は土よりも暗いけれど
喉の奥は月を映す水でゆらゆら光ってるよね
それとも夜毎の人集りに隙なく囲まれ

水の奥を覗き込む彼らの囁きは煌めく影と降り
ざわめき傾く水面に土よりも低く映ってようか
その揺らめく深さに誘われてさえ
一息を限りに溺れようにも足が竦むのは
嵐にも水涸れにも見舞われない穏やかな日だから
とか
嗤われるにも価しないかにも
水に映る声を呑んで泳ぎ回る蛇かに痩せ
二〇二一年九月二十五日

日蔭一つ見付からないのは
強過ぎる陽の光りが日蔭を悉く食べてしまったから
それが全てのそれだけの事だけれど
そんな眺めの怖さは誰でも知ってる
だってそれはもうきっと眺めでもないから
明る過ぎる明るさが眺めを悉く食べてしまったから

それでもその明る過ぎる中で息をしてるようなら
強過ぎる陽の光りに目と鼻と耳は溶け
口を結び立ち竦むだけの事だけれど
そんな姿も眺められない怖さは誰でも知ってる
だってそれはもうきっと誰の姿でもないからね
滲んで丸く浮かんでるような息の音だけは聞こえ
人っ子一人居ないみたいに
いや　みたいじゃなく居ないんじゃないのかな
だなんて
身の程も弁えない言い草が舌先から零れるなら
穢いな　声は涎みたいなら涎だ
涎なら強過ぎる陽の光りも透けて食べられたりしなくて
胸をだらしなく汚せば
滲んで丸く浮かんでるような影が胸だ
驕るように反り返る儘に
そうまで目立っては捧げられるかに切り取られ
間違いなく陽の明る過ぎる明るさの餌食にされそうかな
忽ち

濃い影を柔らかく刻んで細い背を丸めて向ける
立ち竦む姿が疎らにも尽きないかに数えられよう
明る過ぎるなんてあからさまな嘘みたいに
ぼんやりとも暗そうな奥行きをきびきびと拡げて
殺せ！　と声を揃えたいんだ
殺せ！　という言葉だけは用いずに
そんな彼らの手際の良い素速い動きが
強過ぎる陽の光りを何時までも揺るぎなく居座らせてよう
人っ子一人居ないんじゃないのかな
だなんて
身の程も弁えない言い草が舌先から零れるのは
予め定められてる決まりに従ってるだけって
誰もがただ怖くに知ってよう
二〇二一年九月二十六日

声は必ず声より大きなものを含み隠してる

なので重い
それが何か誰も教えてくれなくて
声は止め処なく飛んで来る石礫で
そんなギシギシ音を立てる風の中を掻き分け
ふと
歌う他に許されない子供達の隠れ処を見付けて仕舞う
狭い壁より高い窓から微かに漏れる
尖った声の調べは霞んで嗄れて聴くに堪えず
直ぐにも通り過ぎたい耳が
躓くようにうっかり聴き取って仕舞う
お前は誰では無いのか　と歌うのを
でも直ぐに
そんな事は歌ってなかったし聞こえもしなかっただろ
と足早に駆けたい足は縺れ
重く大きなものをずっと背負ってたと分かれば
それは
お前は誰では無いのか　という問いの他にない
誰では有るのだけなら

誰で有ろうと無かろうと幾らでも出来てたんだ
なので唯一つ
お前は誰では無いのか　を
背負う儘に棄てようにも棄てられない
そう思い知れば誰で有るのも出来そうになく
でもきっと誰かでは有るしかなかろうにしろ
お前は誰では無いのか　の誰か
つまり答えを探すしかなく
でもその誰かなんて何処まで行っても見付からないなら
お前はもう誰かで有ったところで誰でも無かろうな　と
そんな益益重い声ばかりに責め立てられ
風の中はその問われ続ける誰かの声にでも充ちてようか
二〇二一年九月二十七日

だったらもう
お前は誰では無いのか　の答えを見付けてないかな

お前は誰では無いのか　って問い掛けて来るお前だ
だって風の中はそのお前の声で充ちてるじゃないか
そのお前が誰かは知らないけれど
いや
なら少しも答えは見付かってないだろうし
問い掛けて来る知らない誰かだって
そんなの苦し紛れにでっち上げられた誰かでしかなく
風の中の声なんて誰の声でも構わなくて
でまた
お前は誰では無いのか
お前は誰では無いのか
それを知れないのなら
お前はもう誰かで有ったところで誰でも無かろうな
と責め立てられようか
いや
そんな声は何処からも聞こえて来ない
子供達の隠れ処へも戻ってみたけれど
その跡形なく取り壊された跡を吹く風の中も

歌は聴けず石礫なんて一つも飛んでなかったよ
そうして
それが声でないなら問いでもないなら
お前は誰では無いのか　は
お前は誰では無いのか　に取り囲まれてる私だろうか
お前は誰では無いのか　が私なら私は
お前はもう誰かで有ったところで誰でも無かろうな
なんて言わせない
だって紛れもなくそんな
私は誰では無いのか知れなくて私であるしかないんだから
二〇二一年九月二十八日

いや
お前は誰では無いのか　が私なら私は
そんな私を私とでっち上げてるだけで
ただ問いを空回りさせて問いから逃れる為にね

なら　こう問うべきかな
お前は誰では無いのか　と言う問いは有り得るかって
それは　こうして有るのだから有り得えようね
では
その問いは誰が問い誰が問われ
誰が答えなければならなくて誰が答えを導けるのかって
そんな誰らなどを指差せないなら誰も居ないようでもありそうかな
戻るようだけれど誰でも有り得るお前に　この
お前は誰では無いのか　は果たして問いなのかと問い直したくもなるよ
そのお前にはお前は誰なのかをも問いたくなるけれど
誰でも有り得るお前にはその問いは問いではなかろうね
つまり
お前は誰なのかという問いの無いお前が
お前は誰では無いのか　と問われ得るのかとは問えるにしても
問われ得るも何もそれこそ
お前は誰では無いのか　に戻るだけだよね
なら　こう問うべきかな
お前の知らない誰かがお前とは違う誰かに

お前は誰では無いのか　と問うのなら
それは問いかって
問いで有り得るなら誰にとっての問いなのかって
誰が誰にその答えを導き出せるのかって
で
お前は　と問いを投げ掛けられたお前はどうなってしまうのかな
きっと
誰では無いのか　に抛り込まれてる儘に
二〇二一年九月二十九日

血から血を造りたいなら血を味わい尽くさないとね
神の国は血で造られ血を滴らせてる
そんな歌にしたいなら血の味の言葉をたっぷり並べないとね
そんな歌を柔らかく口に含ませて噛み締めながら
空より高くを目指して
その儘ずっと空より高くを目指し続ける為に

たっぷり吐くしかない血をまた喉に流し込み
ぬるぬると血塗れの歌を
磨り減らない輪を回すように繰り返そうよ
頭から頭を造りたいなら頭を囓り尽くさないとね
神の国は頭で造られ頭の欠片を飛び散らせてる
そんな歌にしたいなら潰した頭に言葉を練り込んで
そんなものを口に含ませて噛み締めながら
我を忘れるより遠くを引き寄せて
その儘ずっと遠くの向こうの遠くを探す為に
頭に練り込んだ言葉をまた頭を潰して飛び散らせ
ねばねばと頭の欠片の粘り着く言葉を
磨り減らない輪を回すように繰り返そうか
でもそんな事らはずっと限りなく変わって行くよね
血の中にも頭の中にも神の国は幾らでも造れよう
そんなのもう神の国でも無くなる程に
神の国がまざまざと現れてしまう程に
そんな当たり前な眺めに我を忘れようと
我も我ものの我共が仲間を誘って蜜に集るように群がろう

そんな歌が流れれば
神の国を巡る磨り減らない輪は置き去りにされ
歌だけが神の国から神の国へと過ぎ去って行く
二〇二一年九月三十日

十月

帰り道が見付からないなんて
聞き飽きた言い草には騙されないよ
負けたのはどっちだろう
形有るものなら必ず海に沈められるように時に圧し潰されたか
形有るものに背を向け時に粘り強く纏わり付いて時を斥けたか
決められた道に消え去ってずっと死なずに居られるのか
迷って誤った道に踏み込んでずっと殺され続けてるのか

道を知らない誰かが届けた贈り物でなら占えようね
で
こんな見飽きたものをまたまじまじと
それが他のものと違って見えるまで凝っと見てなきゃならない
謝られたってどうにもならないよ
月が夜に運んで来る明るい静けさに喜ぶ振りと変わらない
だけどきっとそんなものじゃない
月の光りのせいで道に迷ってる誰かが何の手立てもなく
溜息の欠片みたいにキラキラした
夢を押し詰めた歪な石ころを幾つも運んで来たみたいな
そんなものを数だけ並べて積み上げたって
見てるだけで目に罅が入って目は粉粉になって
その一つ一つが鮮やかなそれぞれに違う色に零れ出て
豆粒程の眺めが数知れず飛び散って月の下を彷徨えば
道という道はこんがらがった糸みたいに搦め捕られて行こう
誰かが時を忘れて棲み着いてた辺りのお馴染みの何処へかも知れずに
そりゃお互い様とかまた言い出すんでしょ
負けたのはどっちだろうって科白は嗤ってるのか嗤われてるのか

帰り道が見付からないなんて
そんな聞き飽きた言い草にまたどう遣ったら騙されようか
二〇二一年十月一日

腹を空かす余りに
徐に鈍間な顔を浮かべて陽がまた昇り出す
能なしに過ぎる夜の愚かさ
陽に少しの食い物も与えられず
来る夜も来る夜も為す術なく陽を朝に押し付けて恥じないとは
腹を空かす陽には昼は全てが新しく
だっておお腹が空きっ放しじゃ昨日までの事なんて憶えてられずに
その取り取りの初物を貪り喰い散らし疲れ果て
また腹を空かすまで貪り喰うのを已められないらしく
昼のあれこれを食い尽くそうとも腹は満たされないし
夜に落ちれば陽は冷めた口を閉ざすしかないらしく
だってすっかり初物喰いの味を覚えてしまったんではね

でも夜が少しは賢けりゃ何か遣りようは有ったろうか
陽の口に合う夜なりの初物だって揃えられようか
でも夜の事は時を失うかに闇に閉ざされ分からない
まさか陽が昼に貪った物をじっくり熟すだけの腹が夜とかね
ま　そんな恨み言に甲斐はない
欲深い陽に喰われる為に昼は初物を産み続け
逆らえもせず来る日も来る日もそれらを奪われるばかり
しかも陽に喰われるには何であれ
この世と切り離されるまでに穢されなければならないんだ
それが役割かに昼の時はそれに係り切りで
なけなしの初物を殴り倒し引き裂き切り刻み
水で脹らませ焼きを入れ腐る前に直ぐ様陽に捧げてる
昼こそが能なしに過ぎて
愚かでなけりゃ何一つ産み落とせないかに
穢されては捧げられる初物を孕み続けてる
二〇二一年十月二日

君が立ち上がるまでは誰も
立ち上がるなんて知らなかったんだ
何処にも突き刺さらないようにと考え抜いて
ぴたりと狂いなく尖って
そんな初めて立ち上がったみたいな君だけれど
もう誰もが立ち上がれるんじゃ初めてがどうしたなんて忘れられ
でも忘れられて却って初めては誰にも奪われたりせずに
ぴたりと狂いなく独りで考えて居られるらしいね
そんな事って幾らでも有りそうで
でもきっと
ぴたりと狂いなくに過ぎるのか
独りで考えてるのも忘れて仕舞って
後は息を引き取るだけとも知らずに知らないそれを待つばかりとか
でも引き取られる息に引き取り手が無いのも明らかで
なら
その終わりの一息は息だけで独り立ち上がり
自らを自らな箱に仕舞い込むその箱に

ぴたりと狂いなく収まって収まり過ぎて直ぐに流れ
その流れに圧され破れてその破れた中から
そうとも知らず外から息を吹き込まれ尖って振り返れば
そんな君など忘れて立ち上がろうあれこれが溢れる筈が
そんなものらはそんなものら自らに押し流されるしかなく
そんな初めて立ち上がったみたいな君だけれど
よくもまぁそんな独りで流れにも呑まれず息を継げるとは
そうか
何処にも突き刺さらないようにと考え抜いて
考えてるのも忘れて仕舞ってれば初めて立ち上がるみたいに
慎ましくも勇ましく息は独りでに継がれて怖いものなしだろうか
ならきっと息の引き取り手も君は独りで考えて
その考えの儘にぴたりと狂いなく絶えた息は受け渡されようね
二〇二一年十月三日

巻き貝の殻みたいに捩れながらに育って脹らんで来てるにしても

それが有るのか無いのかの問いを拒むのなら
裸に剥いて逆さ吊りにして
拒まれた問いを引き裂いて終わりにするしかない
なんて
まるで脅してるようだなって
脅し返そうとして脅し返されてるのは
裸に剥かれて逆さ吊りにされて
それで
巻き貝の殻みたいに捩れながらに育って脹らんで行くしかない
その有るのか無いのかの問いの拒みようのない
闇に閉ざされ蠢いてきびきびと形を洗い出される
あからさまな姿で
そのあからさまでさえ有れば
拒みようのない問いは問いの儘に
縛られ締め付けられすっかり音を上げてようか
でそれは
有るのか無いのか何の答えも出せない儘に
拒みようもなくにも問いは拒まれてようけれど

それで
裸に剥かれ逆さ吊りで居続けながらに
その有るか無いかの問いを捩れさせ脹らませ
そんな自らに戦くように自らを育てて行くようなら
巻き貝の殻みたいな姿に戻って来たいだけなのかも知れない
疾っくにその通りな姿に決まってようにもね
あぁなので
その有るか無いかが拒まれながらに問われるしかないんだろうけれど
問われなくちゃいけないのはきっとそんな事とは違う
そのそんな事とは違う先に待ってるに違いない
そんなその通りな姿の面影もない
始めから有るも無いも知れなくて何処へも戻り損ねて行く
有るか無いかの問いだけのお前らしいようなお前だろうか
二〇二一年十月四日

眠るには

眠りが何なのか忘れて仕舞える薬が効くらしいけれど
それには
重さが無いのよりもっと軽い体でないといけないらしく
だって
夢を脹らます春風より軽い足取りは飛ぶように柔らかでも
僅かな鋭い肉の重みが嫌でも眠りを思い出させ
瞬く間に眠りから弾かれる体は
青青と冴え渡って長く途切れない火を吹き流す濃い雲の下を
爪先で硬い土を穿ちながら火を噴くように熱い足で走り回り
その奥深い眺めの果てに至るまで悉く火を奪う企みに苛まれ
眠れないってそんな事だなんて思えばその思いがまた重くて
でも
眠りが何なのか忘れて仕舞える薬なんて試した事有ったっけ
忘れた！
って思えばその思いは重さが無いのよりもっと軽く
重さが無いのよりもっと軽い体を探しに行けそうで
それが見付かる処に眠りはすやすやと待ってよう
って思えば火を奪う企みは濃い雲に閉ざすみたいに隠せて

それに戸惑うのか青青と冴え渡る吹き流しの火が
眺めの奥深くを彷徨い輪を描こう
思いはそれを追って輪を大きく一つ跨ぎ
でもその先の小さな輪をまた一つ潜らなければならないんだよな
あぁその輪の先の狭い岩陰に倒れて眠ってよう
重さが無いのよりもっと軽い体に
重さが無いのよりもっと軽い思いを重ねれば
眠りが何なのか忘れて仕舞える薬なんて要らないよな
尤も
火を奪う企みを濃い雲から隠せてさえいたらだけどね
でも吹き流しの火は輪を描いて逃げようとしてるなら
もう始めから企みはバレてるじゃないか
なんて思いは重さが無いのより軽い筈なくて
なので眠りが何なのか忘れて仕舞える薬に頼ろうと
重さが無いのよりもっと軽い体も探さなくちゃいけない
な事にしろ
火を奪う企みを隠せないならどうしよう
吹き流しの火なんてどう遣って奪えよう

そんな企みは捨ててしまえよ
って火は青青と冴え渡り
眠りは奪われるばかりで
そんな眠りではどう遣って忘れられよう
二〇二一年十月五日

曲がる道には向きが無い
だって曲がるばかりだから
なので這ってでしか進めない
立ち上がれるなんて事も無くて
だなんて分かったような顔で分かるのは
歩いて歩き疲れてそれでも
見晴らしも良く足取り軽く歩けて仕舞えるからかな
歩けるかどうかって疲れるのとは違うらしい
曲がってる道を疲れた足で幾ら歩き回れたって
這うと歩くは同じようで同じでないような事で

あぁそれってきっと
笑えないと笑えるが同じようなのと同じで
曲がる道は笑えなくて曲がってる道は笑える
つまり
笑えないから曲がる道は這ってでしか進めない
笑えるから曲がってる道は疲れても疲れ知らずかに歩き回れる
でも何時からか歩いてるのに笑えなくなってるようで
笑おうと思えば笑えるけれど作り笑いで
それって
這ってでしか進めない曲がる道を探してるからじゃないか
でも見渡す限り曲がる道なんて無いんだよ
頭の中にしか
て言うか
頭の中は曲がる道だらけではち切れそうで
だって曲がる道が頭の中に閉じ込められてるのが間違ってる訳で
でもどう間違ってるやら
曲がる道を這ってでしか
頭の中を覗ける処までは行けないんじゃゃね

だったら歩くのを已めて兎も角這ってみたらどう？
なんて言われなくたって
笑えなくなった時からずっとそうしてるんじゃないかな
だったら疾っくに曲がる道を這ってでしか進めてないんだよ
ただ曲がる道には向きが無いから
曲がるばかりで進んでないとしか思えないだけで
そう遣って曲がる道だけを向きも無く進めてるんだ
曲がってる道は向きに沿って幾ら歩き回れるにしても
疲れ知らずに疲れるだけで少しも進めてなかったんだよ
って分かればそれは笑えなくなってしまうよね
笑えないと笑えるが同じような同じでないようなのは同じだけれど
二〇二一年十月六日

秋に
花の散る音を聞いたよなんて歌はお笑い種さ
心を失う音を聴いてるだけなのに

そう分かって心を花に擦り替えるなんて
その馴染みのあざとさで
生きる時を数えて積み上げたりしてるなんて
そりゃ何の名も呼べなかろうね
己の恨みにさえ背いてるものね
何処から生まれて来たか覚えてる癖に
まだ温もりを失ったばかりだよ
なのにそれを見ず知らずの人の家の戸口に置き捨てて
馴染みの泥舟で馴染みの入り海へ漕ぎ出し
与えられるべきものをうかうかと捨てようって
まだ温もりも知らないのを良い事に
そうして生きるのに背くのが生きる事さなんて嘘を吐いて
独りっ切りだからって嘘を海へ沈められるとでも
そしたら名も呼べない嘘のような恵みに巡り合えるとでも
どう遣って生まれて来たか忘れられなくて
そんなの何の嘘で擦り替えようもないって分かってる癖に
積み上げた生きる時との取り決めを消し去ろうって今更に
失われた心に背くのが生きる事さってわくわくと楽しげに

替わりに受け取った恵みを持ち帰れば
何処からどう遣って生まれて来たかを
ずっと失わずに暮らして行けるとでも
二〇二一年十月七日

回るは繰り返される高みで
流れるは立て続けな交わり
な儘に
繰り返されは繰り返されない
立て続けは立て続かない
そうでしかないのはきっと
食うか食わないかの話しだよね
それとも回されるのは真ん中で
流されるのは輪だろうか
そうだ輪だ　やっと輪まで行き着けた
食うも食わないも輪の中で輪を回す事だよね

ひたすら黙り込む為に
後後ひたすら黙り込む羽目に陥らない為に
な話しは
他の話しを全て食い尽くす程に孰れは聞き飽きようね
だって食うかも食わないかも
終わる終わらないの終わらない終わりの話しだよね
回るが繰り返される高みなのは
食うが食われて食われるが食って
終わらない終わりの始まるよりもっと始まりな
流されるのが輪な筈のない
立て続かない立て続けな交わりが
繰り返される高みを繰り返さない為に
回るを止めようとしてしくじりに塗れる話しで
いや話しじゃない
これだけは話しじゃないんだ
だって回ると流れるとは
高みでなくに交わらなくての回ると流れるで
そんな事から高みと交わりを救い出そうと

繰り返される回ると立て続けな流れるが
殆ど溶け合うかに互いを見知らぬ儘に
ひたすら黙り込む為に黙り込み続け
高みでだけで交われる筈と回るを恨めしそうに流したそうで
二〇二一年十月八日

庭のない家は何も見えない
何も見えない為に庭がない
庭のない家でうっかり何か見えるなんて事になれば
見る見られるの殺し合いなら家は守られようけれど
殺し合わないって決まってれば誰も勝ち残れなくて
見るも見られるも殺されて
家は壊されるしかないよね
そう遣ってどれ程の家が壊されて来たか
て事は
どれ程の家が建て替えられて来たか

なんて言うだけ虚しいのは
見る見られるは壊れも建て替えも出来ないからで
ま　それはそうなんだけれど
庭のない家そのものを無くしては元も子もないにしろ
庭のない家の
庭のない他にも何か無くせそうな事が有りそうで
例えば
庭のない家へ辿り着ける道がないとか
庭のない家の事を誰にも知らせないとか
いや
そんなの疾っくに考えられ試みられても来たけれど
庭のない家だけに落ち着いて仕舞ったのは
庭のない家の何も見えないのって
見る見られるを拒みながら恐れながらも
見る見られるを誘き寄せようとしてるからとか
庭のない家さえ無かったら
見る見られるは拒まれも恐れられもせず
見る見られるを誘き寄せるまでもなく

殺し合うも殺し合わないも無くなろうかも知れないけれど
でもそれで
庭のない家は要らないねってなったら
何もかも要らなくなりそうで殺されるよりもずっと怖くて
二〇二一年十月九日

独り旅に出られるのは
帰りたい古里を憶えてられるからで
でなければ
この独りは
歩いても走っても凝っと動かずに
動くのは動かない筈の道ばかりで
にしろ
その動く道の上を動かずに居続けて何が悪いのかな
その動く道を独り動かずに居られるなら
そこは日日帰り着けて留まれる古里のようなものだよね

いやそれだったらそれにしろそう出来るのは
帰りたい古里を憶えてられるからで
もし忘れて仕舞ってたら
動く道に運ばれて何処へやら消え去ってよう
にしろ
そこが古里のようなものって事なら
そこで古里に帰り着けてるかは未だ定まってないようで
そのどっち付かずが独り旅の如何にもそれらしさかな
だなんて心の隙かゆとりかどっちにしろ
そこに確かに身を落ち着けられる古里なんて望むものだから
却って帰りたい古里を見失い
うろうろおろおろと
まるで古里と係わりのない話しに隙かゆとりの心は奪われ
動く道の上をそんな話しに当て所なく流されて行くしかなく
でも古里を忘れたでもないなら行き着く先は古里しかなく
でもそこは憶えてたのと似ても似つかぬ見知らぬ処で
何でここが古里なんだ！
忘れて仕舞ってたのは何だったんだ！　忘れて仕舞ってた？

とか叫ぶと
見知らぬ誰かな私が私に代わって出て来て
私が私の代わりに私をしてたのさ
なんて話しで
なんて話しは
心を奪われてた古里と係わりのない話しとつるりと繋がり
見知らぬ私が私なんだって確かめられて
もう旅は終わりの独り旅の果てに確かに身を固められたよ
なんて話しに
隙かゆとりの心は独り白白と奪われて已まないんだけれど
二〇二一年十月十日

生えてるのが翼だったら
舞っては墜ちる
生えてるのが脚だったら
走っては滑ろう

二つ合わさると一つ
じゃなく二つに二つ
二つに二つなのに一つじゃない身がややこしい
と見えて
二つに二つなのに一つじゃない
そんな一つなら
舞っては墜ちるも走っては滑るも一つには見えようね
なら何だって一つだろうよなんて声も聞こえそうでも
耳さえ塞げば耳の中は一つばかりが数え切れず溢れて
だって
舞っては墜ちるも走っては滑るも必ず耳を塞がせよう
どっちも音ばかりは一つも二つもなく音なら音ばかり
一つも二つもない音なら生きるも生きないもない境を
さて舞っては墜ちるか走っては滑るかどっちなのかな
生えてるのが翼か脚かに懸かってるって訳でもなくて
だって生きるも生きないもない境なんて
広過ぎるか深過ぎるかも知れないさ過ぎて
だったら広くも深くも無さ過ぎてるって知れ過ぎてる

翼の舞っては墜ちようと脚の走っては滑ろうと同じな
二つに二つなのに一つじゃないそんな一つしかなくて
見失われそうに見失われずに音ばかりを響き渡らせる
あぁ耳にはそれは拡がるだけ拡がって持て余されよう
だって生きるも生きないもない境なんて
広過ぎるか深過ぎるかも知れなさ過ぎて
二〇二一年十月十一日

目が高い
水を忘れて来たのさえ忘れて
目を落とすと水を噴く土を舐める舌は
転がる水玉を舐めてるようで
逃げる水玉を追ってるだけで
それを良い事に舌は
高い目を騙るのが良い事のように振る舞って飽きずに
嘘を撒き散らし乾いて罅割れ血を滲ませ瘡蓋だらけで

負けは明らかじゃないかって嘲笑われ
でも
目を落としたのを今更に思い出し
土を跳ねて転がるその目玉を水玉の替わりに舐めたいけれど
思い通りにならないのを罵るのがやっとで
息を切らして一息吐くと
転がるその目玉はそうして失ったにしろ
もう片目が残ってるのを今更に思い出し
でも酷く輝いて何でも見通すなら見通し過ぎて
何処までも透き通ってしか見えないようで
そうしてこの世はただ透き通ってるばかりと見抜けたなら
土を転がり何一つ見通せず闇ばかり見回してる目玉を
この世の果てに追い詰めるように見付けよう
でも
傷だらけで血塗れのその目玉は
血の匂いを嗅ぎ付けて舐めに来る酷く輝く片目の獣を見付け
巧く避けて回ってないかな
だったら

土を転がり何一つ見通せず闇ばかり見回してるなんて事はない
寧ろ闇しか見えないのは酷く輝く片目だろうよ
この世をただ透き通ってるとしか見抜けないんじゃね
でも
お蔭でその目玉は易易と獣の牙から逃げて行けそうで
二〇二一年十月十二日

目覚めたには違いない
でも違いないのは目覚めだけ
じゃ他は？　の他が何なのか覚束なく物足りなくて
夢を追って墜ちて行った女を一人知ってるけれど
あれは夢へ墜ちたのか夢の手前へ墜ちたのか
それとも墜ちる夢に囚われて
その夢を叶えたのかも知れないな
その叶えた夢へ夢見た通りに墜ちて行けて
で　それっ切り

その女の姿は何処かへ砕け散って
再び目覚めはしない眠りそのもののような
そんな目覚めだけが残ったに違いない
いや
と女の姿はそこに大きく甦り
もう目覚めも眠りもないばかりに
産まれたばかりのような
向きは定まらない
向きの定まらないでは取り留めもない寝返りを繰り返し
産まれたばかりな姿を取り逃がして行く
そうとしか有り得ずに産まれた仕舞った儘に
取り返しの付かない目覚めと眠りの渦に締め付けられる
もう目覚めも眠りも無いとばかりに
なんて事しか思い浮かばなくて
どうして息をしてられるのかな
な
産まれたばかりな息さえ継げれば
眠りも目覚めも一つ限りの夢へと墜ちて行くしかないのかな

そんな夢も要らなかったに違いなくに
二〇二一年十月十三日

迷子なんだって言いたいんだろうな
道端に蹲り足元の土を抓んでは頻りに舐めてるよ
崖が崩れ少し先の道は塞がれてて
それはそれで確かに酷い眺めだけれど
また違う事だろうな
だってその子は背を向けてるから
背を向けてるから？
その子の姿はその丸い背だけだよ
なら背を向けられてるのは誰って誰もなく
慌てて崖崩れに目を遣ると
この先どっちへ行けば良いか分からなくて
どうやら迷子なのは誰って誰な私のようで
それをその子に尋ねたくなって

どんな顔してるか覗き込もうかなと思うだけで
先回りされるみたいに顔は土塗れの手で掩われて仕舞う
そうか
その子だけが迷子で居られるんだ
なら誰な私は迷子でさえも無くて
ここからとっとと消えるべきかも
でもどう遣って？
三つ思い付いた
一つ　崖崩れに埋もれる
二つ　道に溶ける
三つ　迷子の背中に埋もれて溶ける
三つ共に酷いけれど酷い程に良いと思える
だって酷い程にそれに生き死にを賭けたくなるし
徒に生き死にを賭けたところで
その先は何も無いって決まってて
そんなで何も無い先を見通せるなら
その目をどっちへ向けたって
何だって見通せようからね

二〇二一年十月十四日

誰が袋を殴ってるのか
きっと殴るのとは他の事をしたいんだろうな
袋詰めにされた空が殴りに殴られ
大荒れに荒れて荒れた儘に静まるようだけれど
その静まりは火に満ちて溢れてる
その溢れて行く行き止まりの山裾は熱く破れて裂け
その裂けた大きな口を入り海へ沈めて行く
そんな眺めを眺めてる内にこっちはすっかり焼け跡じゃないか
だってその焼け跡に花を移そうと
根ぐるみの花花が運ばれて行くよ
あぁ何も戻っては来ない！　って誰かが叫んだとしよう
その誰かが袋を殴ってる誰かじゃ無いとは知れるよね
で
そろそろ誰が袋を殴ってるかを突き止めなければならない

そんな楽しくもない成り行きに身を捩り
捩れたからには必ず戻らなくちゃいけないそっちだろうな
のそっちが火に包まれる山裾でも燃えてる海の底でも無いのなら
有りもしないそっちだろうか
なそっちだけが焼け残ったかに薄く水を張ったみたいに
狭い中に淀んで闇をだらだら横流しに垂らしてそうで
捩れた身がそんなそっちを高くに振り仰ぐと
その狭い中を丸ごと呑み込むような大きな口が裂け
でも密かに望まれてもいたらしい盛んな火の姿が覗くでもなく
こんなの
必ず戻らなくちゃいけないそっちじゃない！　って誰かが叫んだとしよう
その誰かが袋を殴ってる誰かじゃ無いとは限らない
なら誰かなんて誰でも構わなくて
そんな誰でも構わない誰かが唯独り
何処へも戻れないのを心に懸けて身を窶し
殴るのとは他の事をしたいんだ！　って叫んだとしよう
でもそんな誰かじゃ袋を殴るしかなかろうね
そんな独りな誰かが数知れず満ちて溢れては

その横流しにだらだらと垂れてよう眺めが口を裂いて拡がり
薄く張られる程に暗く淀んで窪む古い儘の水を大きく覗かせ
戻って来るならこっちだろうにって嗤ってるのをどうしよう
二〇二一年十月十五日

町と言う町が町なんだって言うのなら
人の住む町だけが町なんじゃなく
人の住まない人目に触れた事もない町の端っこに
氷は火よりも熱ければ溶けないとか色色伝わって
そんな事だから夜が明けないんだ
なんて物の理を説いてる積もりの
小さな袋の鳥を抱えて踊るように走りたいと望みは高い
でも蹌踉けながら舌打ちするのがやっとの人でなしの影が蹲る
けれど人でなしの影の考えでは忽ちに病んで
凝っとしながらも端っこに行き泥めば町は捨て去られようか
そうして何も起きないんだから町はそれで構わなくても

擲たれた病んだ考えの中の袋の鳥だけは
その町の端っこにやっぱり凝っと息を潜め
抱えられて踊るように走りたいと望まれるのを待ち倦ね
瞼を開け閉めしてる
その開け閉めを番い目にでもしたのか
どうせ待ち倦ねるならと
町の端っこのその端っこからまた端っこの町へ乗り移り
それとも飛び移った積もり？
誰も知らないより誰にも知られない初めてのこの町には
何て測り知れない理が満ちている事か
だなんて
強がりを言いたくなるのをやっぱり息を潜めて凝っと堪えてると
その儘に望まれて抱えられて
もう踊るように走ってるに違いない！の
何が踊るように走ってるかなんて何だろうと知った事か
そんなのどうせ誰も知らないより誰にも知られない事さ
それよりここで声を限りに啼こうなら
この袋には何て測り知れない理が満ちている事かって

決まってそう知らせられるに違いない
だってそれって全く測り知れない理だもの
二〇二一年十月十六日

風に攫われたいかに
風に招きを請うのは
そうして風に転げながら風の姿を胸に畳み込み
胸に響く通りに風の名を定めなければならないからで
風の名がどちらを向くかで
傷口に厚ぼったく溜まって干涸らびた膿の色も変わろうし
その額の傷が額から何を取り出す為の傷だったかも明かされよう
しかしそれより
風の名の善し悪しが心に懸かる
風の名に善し悪しなんて無いのは知ってても
孰れは風の名の出口を潜り抜けて行くしかなかろうし
それとも風の名の出口に至り着けないなら尚更に

風の名が心に浸みるのは避けられない訳で
だったら風の名に善し悪しが無い訳なんて無いよな
なんて思えば
有りもしない善し悪しに拘るしかない訳で
そうか
そんな拘りが額の深い傷の奥から取り出されたんだな
なんて思えて
風に攫われたいかに
風に赦しを乞うのは
そうして風の名に額の傷口を擦り付けては歪め
膿の裂け方や血の滲み方で善し悪しを占いたいからで
二〇二一年十月十七日

風の名なんて始めから知れてたよ
風の名なんて知れる筈は無いってね
風の名だけは知れないって知られて

それで他のものは何だって易易と
そのもので有るだけで名は知られ
そうと知られた揺るぎない名は
鋭い刃のように風に飛ばされ
次次に数を殖やし狭そうに連なり
遂には折り重なって風の行く手を遮って
風を粘粘した砂の塊のようにして止めて仕舞おうか
そんな粘粘した風の塊では必ずその名を知りたかろう
風の吹き始めた辺りの遠くへ遠くへと自らを顧みて
そこに風の名を示す微かな徴でも見て取ろうと
それで風の名なんて知れる筈は無くたって
ものの名の全て出払った凋んだ穴のような痕なら見付かろう
さあどうだかねってものの名の全てが風を責め苛もう
そしたら風はそっちとこっちに引き裂かれそう
そっちはさらさらとこっちは粘粘と
そっちは真新しくてこっちは薄汚れて
水飴みたいに細く曲がって延びながらに
くるりと結び目を拵えたりすれば

そっちとこっちに断ち切られ
そんなそっちとこっちで
風の名なのさって
風にも聞こえず
名は名を名乗って
名も名は知らず
二〇二一年十月十八日

夢を選べる夢を見ている
とは言え
ゆらゆら並べて見るとどれも見窄らしく
眺めてるだけで嫌な中には臭くて近寄れない夢まで偉そうにしてる
これらを全て吹き飛ばす夢が欲しいところだけれど
どうやら肥えた土に埋まりたげな夢でも見て眠ってたらしく
夢はどれもどっしりと根を下ろし
その吸い上げる水の深さと重さを互いに褒めたりしてるよ

そんな夢と夢の軽口の飛ばし合いに耳を欹てて
その可笑しみから夢を選ぶしかないのもがっかりだし
とは言え
これも夢だろ
ならば疾っくに夢を選べるこの夢を選んでるじゃないか
この夢を毀さない限り並べた夢から夢を選べはしないだろうに
とは言え
毀したところで碌でもない夢を選ぶだけなら毀したくも無いかな
行き成りの
そろそろ水遊びは已めにして陸へ上がれよ！
の鋭い声は何が促されているのか
詰まらない夢と戯れてても切りがない
そろそろもっと頼りになる夢を真っ新に見直せと言う事か
声の鋭さと釣り合いを取るように明日の思い出が甘く仄かに甦って来て
その暗い遠くへ去っても流れてもビクともしない暗く遠い明日の中に
どんな奴がこの夢を見てるか大まかな暈けた姿が細く佇むらしいな
そいつは酷い子供で
何の釣り合いを見たって力尽くで毀したくてうずうずしてそうで

そいつの息の根を止める正夢をきっちり見たいところだけれど
誇らかに明日は暗く遠くへ流れ去るようにもビクともせずに
もう思い出かも怪しい明日自らを穢して犯して楽しむかに
そいつに思う様幼い昨日の夢を見せたがってるようでは
その昨日には思いも寄らないその夢は
毀れ果ててばらばらに臭い水辺を漂う夢なんだろうか
二〇二一年十月十九日

帰りは何時も真昼の
尖るように幅の狭い街並みの慣れた道は変わらずに静かでも
高いたっぷりな陽の光りは朝の儘に眠りを促すかに色付いて
弾む骨張った足先をまた細く見せて心も少しだけ弾むけれど
今この時をずっと年を経てもこの儘一つもきっと忘れないと
はっきり分かるのは
分かるから分かるんで
何故分かるかなんて分からないんだから分からなくて良くて

歳を重ねた身が今この時を懐かしんでる姿が頭から離れずに
高い陽にたっぷり温められた足は幼ささえ取り戻す程に軽く
この軽さの再び戻らなかった事も懐かしまれるのが分かって
今にも浮き上がりそうな足取りは少しだけ惜しくて愛おしく
でもこの愛おしさを今この儘に失うしかないのももどかしく
いや
何かこの軽さを何処かに取って置ける遣り方が有るんだって
有りもしない事に何の考えも浮かばず頭は空回りを繰り返す
その空回りを懐かしむ歳を重ねた古い頭も温かく空回りする
そうしては今この時を惜しんでよう歳を重ねた身に向かってて
年若い今の身は知らず繰り返し懐かしげな眼差しは送れても
その眼差しは今を限り軽い足取りと共に消え去るのも知れて
この帰り道が何時までも続けば良いのになって行きつ戻りつ
二〇二一年十月二十日

お別れは言わないよって言ったのは

夕暮れまでには森から戻るからとか
でもそれは騙す為で
な積もりなんだけど
誰も騙せてないんだ
だって身震いする程に嗤われて
そんなに嗤うには技も要ろうね
嗤い過ぎて歪んだ口から泡を噴き
うっかり冷たくなってる奴も一人や二人じゃ無さそうで
それは穏やかじゃないぞって騒ぎが騒ぎを呼んで
冷たくなった体なんてもう引き裂かれてるじゃないか
そのぐにゃぐにゃでばらばらな誰が誰とも分からないのこそ
そりゃ可笑しくて身震いする程に嗤われよう
嗤うから嗤われるのさ
そうしてまた嗤った奴も冷たくなって
冷たい体は引き裂かれ嗤われて
それを嗤った奴も同じ目に遭えば
お別れは言わないよって言ったのは
我ながら見事にぴたりなお別れの言葉で

森へ入って独りで明けない夜に隠って
何をともなく嗤い続け
嗤う技を誰よりも身に付ければ嗤うも嗤われるも怖くない
いやそうでもないぞ
だって体はもう腕から脚から冷たいなんて
何を嗤って仕舞ったんだろう
何に嗤われて仕舞ったんだろう
だなんて死に際にそんな事を考えさせられるなんて
どうにも嗤わずには居られないよな
そんな事を嗤って嗤われてる奴なんて見知らぬみたいに
嗤って嗤われてトドメを刺して刺されるみたいに
そんな事にならないなら必ずそうなって欲しいみたいに
二〇二一年十月二十一日

死ぬのを考えちゃいけないよって囁いて欲しい
そしたら却って死ぬしか考えられなくなって

でも死ぬのって考えられる事じゃないんだよね
死んでからならたっぷり考えられるかは知らないけれど
そんな考えられない事を考えてたんじゃ死ぬに死ねなかろうかって
じゃどうしたら死ねるだろうなんて泥沼に嵌まり込んでも
泥沼じゃ体が沈まなくて溺れ死ねも出来やしないよなって
笑いが込み上げようか
その笑い声の高い響きが囁いて貰ったお返しって訳なのさ
だなんて嘯いて力の湧き上がる体は疲れ知らずに撥ね回り
泥沼なんて泳ぎを覚えた憶えもなくたって泳いで渡ってる
その渡り切った先でなら易易と死ねも出来ようねだなんて
ここも笑いが込み上がるところかな
まだ生きてられたらね
だなんて嘯いて力の湧き上がる体は硬く逞しく突っ立って
誰が何の為にこんな事を考えてるんだろうって見下ろせば
誰も彼もが生き死にの全ての為に考えてるのが見渡せよう
ここもまた笑いが込み上がるところかな
もう死んでられたらねアハ
でも

うっかり生き死にの外へまで食み出して仕舞ってるようで
死ぬのを考えちゃいけないよって囁いて欲しい
そしたら戻って死ぬしか考えられなくなるから
二〇二一年十月二十二日

白く透ける丸い月へなら
円い穴を開けられる力を知っている
その穴と咲く花の匂いが混じって
思い掛けず思ってた通りの知らせを受け取った時から
悪い知らせだとは知れてて
だってもう心は動いて後戻り出来ないからには
と知れるからには
知らせは良い知らせに違いないと月の眺めに言い聞かせないでは
時の流れからずり落ちて肉も骨も粉粉に砕け散りそうで
その悪い良い知らせに縋るように
白く透ける丸い月に開けた円い穴を獲ろうと

引き締まった体は躍って後戻り出来ないからには
月も穴も真っ白くに失われて上も下も見失って
ならきっとそんなそこへ墜ちて行けてるんだとか勇んで
悪い知らせに身を滅ぼせるなら良い知らせに違いないと
良いと悪いの匂いが混じれば始めと終わりはそっくりで
いや穴と咲く花の匂いがそっくりな筈が無いように
それは穴が穴なように違おうし花が花なようにも違おう
そんなにも酷い違いに距てられ
そんなで始めと終わりも有ろう
そんなで始めと終わりが有るなんて全く悪い知らせそのものだ
なんて思えて仕舞えるなら事はもうそんなで済まされてて
その悪いばかりな終わりは始めとそっくりで
穴が穴なばかりな穴はたった一つに時の流れとそっくりで
その穴と咲く花の匂いが混じって
悪いのはただ止められない時の流ればかりと知れて
それも悪い知らせだと始めから終わりまで知れてたとも知れて
それで咲く花が萎れるように辻褄が合うんだって見切れたなら
受け取れる知らせなんて良いも悪いもそっくりだし

そのそっくりに
失われた身も心も終わりなんて無しに
ただ始めばかりな儘に流されて行こう
二〇二一年十月二十三日

唇の上げ下ろしは
その度毎の血の入れ替えで
それは狭いせいだろうか
凝っと見詰められてるせいかな
女に
男みたいに
目の前の女なんてどれも男より男だけどね
込み上げて来るのが憎しみや怒りじゃないとは分かってても
況して悲しみや諦めな筈もなければ
憎しみも怒りも紙屑みたいに捨てられる
血の入れ替え位ではとても収まらない

でもそれはその重さでぽとりと落ちて
青葉の繁る中へ転がって消えたらしくて
後を追おうとするけれど
捨てられた憎しみと怒りに躓いてばかりでは
寝た切りで起き上がれもしない女に笑われて
笑い返して遣れば済むのに躓いてばかりでは
優しく抱く振りで生きた儘囓り殺したくなる
替わりに硬く肉厚な青葉を囓り捲りたくなる
手近な枝を曲げると青葉の隙間から覗くのは
どんな強い光りも覆い包む柔らかい眼差しの
円らな瞳を輝かせる長く何処まで延びるのか
青葉より青いなら透けてる身で蜷局を巻く蛇
二〇二一年十月二十四日

初めての色は黒だったと言われる
黒と見えて紫だったとも言われる

でもどちらも赤から目を背けながらで
始めから明明と色を垂れ流しているのは赤だろうに
誰もそれを言わないのは
赤を色と認めたくないからと言うより
赤に色と違うものを見て仕舞うからで
赤と絡む身は連れ去られそうだからで
赤でない色が全て褪せて仕舞うからで
赤を見過ごしていた目を眩ますからで
赤は幾ら引き千切られても赤だからで
赤が口を開けば全てを呑み込むからで
赤がそれ程のものなら赤は色じゃない
赤が色と見える目など赤を見ていない
始めから誰も赤から目を背けてるからにしろ
でもどうやらこれは赤に限った事じゃなくて
目を背けられる色はどれもこんな事になろう
試しに紫から目を背け紫を色から遠ざければ
黒を除く色と言う色が紫に呑まれ消え去ろう
いや

紫だけが始めからそんな危ない色なんだろう
誰もそれを言わないのは
紫を色と認めたくないからと言うより
紫に色と違うものを見て仕舞うからで
紫と絡む身は連れ去られそうだからで
紫から僅かに覗く赤へ身を墜として行きたいからで
赤く根は拡がって紫に伸びる茎の先に黒い花が咲く
その通りな絵さえ画けたなら色など忘れて仕舞えように
そしたらもう色なんて目に映り込んだりもしないのにな
二〇二一年十月二十五日

怖じない目を尖らせ
陽に舞う風まで読み取っていた頃
思う様その目を
向きを定めずに水に走らせるのが好きだった頃
それは何の頃合いも計れずに

海に断たれる草原の草の知らない色を見たくて
光りを失うより深い闇の匂いの底へ墜ちたくて
それはきっと日日命を失う事なんだろうなって
ひんやりと堅い左胸を触りながらには分かって
探してたのと違うそれをそれだ！と探し当てて
でも炎に包まれるかに急ぐかに
高い陽を黒く映して黒光りする玉虫に見立てて
それがそれと違うなら何を追っていたんだろう
それは何の頃合いも計れずに
二〇二一年十月二十六日

古い寺の跡だという更地を見に行った帰り
川向こうの古い家に匿われてた
真っ白い顔をした女を思い出したにしても
その女を古い家から奪い出して
追っ手の目を眩ます為に箱へ入れたままでで

さてそれからどうしたっけかな
女を隠すに持って来いの箱に見とれる内に
箱の中の事はすっかり忘れてた
陽を浴びる川へ流して錦織かに煌めく箱を
眺めてたかな覚えもあるけれど
もしそんな事なら陽を飾る為の女だったか
勇んで息を弾ませ箱の中で跳ね
骨が肉を破り骨も折れ血塗れの塊で転げて
箱の闇を照らそうと陽を真似て
自ら輝けるなら炎に包むかに箱を打ち砕き
高い陽とキラキラと顔を合わせ
真っ白に煌めかせた川の流れを海へ入れて
海の眩しさに陸も燃え上がれば
これ程に陽を喜ばせる眺めも他に有るまい
二〇二一年十月二十七日

そう言えば前から
（なんて言い出すお前は誰だ？）
陽を喜ばせてくれとか頼まれてたかな
それで暇を見付けては
女をぴたりと隠す箱を造ったんだ
女を入れて箱をぐるぐる振ると
女の骨が軋んで鳴って時を計るんだ
計られた時は箱に閉じ込められた儘で
どんどん濃くなって遂には燃え上がるって絡繰り
でも女なら誰でも構わないって訳じゃなく
高い音を鳴らす燃え易い骨の持ち主でないとね
それも女がそれをこの上なく喜んでないとね
だってその喜びが陽を喜ばせるに違いないものね
でもこんな事は遠い昔から伝えられてて
箱造りはそれをなぞってるだけで
こんなのあちこちで遣り尽くされて疾っくに飽きられてて
箱の女は燃やされ損みたいなものだけれど
その真っ白い顔の女が燃やされたがってるって

女の知り合いの知り合いにどうしてもって請われてね
忘れてた訳じゃないよ
そんな事も有ったかなって
二〇二一年十月二十八日

香しい光りを煌めかせる匂い
匂いは輝いて輝きを香らせる
光りは匂って香しく輝くけれど
その輝きは匂いに覆われ
香りは輝きに包まれて匂うのでは
光りも香りもまるで閉ざされて仕舞おうね　なんて囁かれ
その覆いを切り裂き包みを解いて開くのが
何の輝きでも匂いでも無いのも知れてよう
だって
そんな光りや香りを何処から持って来られるのかな
だなんてその匂いも光りもしない包みに

然して考えもなく目を凝らしたりしちゃいけなかったかな
だって
その包みの中に覆われてしかそれが無いのなら
その中からそんな光りと香りを掴み出すしかなかろうなんて
そこでもう間違えてるんだよ
そう分かってても
その匂いも光りもしない中へ吸い取られて行くのを望んでる
その望みの何てぎざぎざしたどろどろした輝かしさと香しさ
でも
掴み出せるのはその哀れなぎざぎざざと惨めなどろどろだけで
手掴みにしたそれらを捨ても出来ずに貪り喰うしかなければ
身は
光りの匂いと匂いの光りに刺し貫かれないでは耐えられずに
苦し紛れに取り敢えず腹を裂けば腹から零れ出て来よう
ぎざぎざに纏わり付こうかな輝きに
どろどろに絡み纏わろうかな香りに
どのようにか包まれ覆い込まれて行けないものかなと
その望みの何てぎざぎざしたどろどろした輝かしさと香しさ

その光りと匂いにしても更にまた覆い包まれ閉ざされる儘に
二〇二一年十月二十九日

手を擦ってれば手を冷やす水が噴き出す
手を擦ってれば手を燃やす火が噴き出す
どちらかなら始めからそうしたかったみたいで良いけれど
どちらでも無いとなるとそうしたかったとも取り繕えない
何も起きないで手を擦る為に手を擦るではサマにならない
それとも手の下で水と火が互いを消し合う為に噴き出して
物凄い事になってるのを手を擦る動きで隠し果せてようか
いや
そんなようにしか見えない奴は手を擦った事もなかろうね
水と火が消し合っては水を消す火と火を消す水が絡まって
渦を巻いて指の間から絶え間なく噴き出してるのは何だよ
火が噴き出すのは水からで水が噴き出すのは火からなんだ
他に何処から何も噴き出さないって

そんなのは見えるも見えないも無く
止まらない指の動きが知ってるよね
指の動きに任せて置けば冷たいと熱いの狭間に滑り込んで
始まりの火を噴く水と始まりの水を噴く火を探り当てよう
その先は火と水をその為すが儘に噴き出させ渦を巻くのを
手玉に取って転がして思うが儘にのたうち回らせられよう
二〇二一年十月三十日

物語りなんて語られた事はないよ
物語りなんて硬い殻でしかないよ
中味は何時もすっかり空っぽでも
それを物語りだぞぉって騙ってる
うん
で続きは？
その騙られるばかりで語られた事のない物語りはどうなったの？
だからね

騙られた空っぽな硬い殻な儘で終わりだよ　おしまい
うん
で続きは？
だから
終わっても殻は硬くて毀れずに空っぽなら何でも放り込まれて
何処までも騙られ続けて転がって行きました
どうだ！　物語りだぞぉって　おしまい
うん
で続きは？
はい　えっと
俺は躓いた事はないし躓くが何かも知らないという男が居ました
でも彼がそう言えるには
躓いた事があって躓くが何かも知っていなければなりません
それをそうとは知れないのが彼の躓きでした
なので彼は躓いても躓いても躓いてると知らずに
何にも躓かずに生きて行けました　おしまい
うん？
で続きは？

はい
この硬い騙りの殻と躓き躓かず男のおしまいは
どちらも始めから始まってなくておしまいです
（何故なら騙るも語られないも躓くも躓かないも同じだからです）
つまり始まってないのではおしまいにもなってません
なので
おしまいにもなってないおしまい　からの
で続きは？の続きも始めから始まってなくての続きです
つまり始まってないのでは続きなんて始めからありません
うん
で続きは？
はい
ありませんの続きの続きを知りたいのなら
始めから有りもしない続きをそうとも知らずに
で続きは？で続きは？で続きは？で続きは？で続きは？…
と続けて行けば何をも続けて
何にも続けられずに生きて行けます　おしまい
二〇二一年十月三十一日

十一月

道へは
生き物の灰の生きた儘の匂いがキツくて近寄れやしない
道を外れ
屍かに生臭い虚ろな石の匂いに導かれるなら迷わない
石の下に埋まる骨の匂いまでは嗅ぎ取れないけれど
藪の中でも真っ直ぐ行く先は見失わない
だって行く先なんて無いから
何時もただ境目を辿ってるだけで
でも道が横切って来るなら境目を見失い掛けて
その時だけは道を跨ぐ先の境目を探さなければならない
それを中中見付けられない儘に

闇雲に道を突っ切ったりして境目に辿り着けないと
道の灰の匂いに胸を押さえ付けられ息苦しくて弱る
そしたら少しでも灰の匂いから遠ざかろうと心懸け
闇雲に走ってれば境目に行き当たれる筈が
鼻が利かないのか
何処まで行っても石の匂いの生臭さに辿り着けない
そうしてぶっ倒れて息絶え雨風に晒され骨に成れば
その匂いで境目が引かれそこを辿り行き来するのは
孕んでるか孕ませたかで
踏み付けられる骨が軋んで裂け虚ろに重く鳴る度に
聴く耳の中も虚ろに響いて生臭い石の匂いを放てば
子を産み落とし養うにはそこなら持って来いだって
そんな耳の中の形の窪みが石の下に探しに行かれる
そんな処は境目を辿って進んでれば必ず辿り着けて
生臭い屍の匂いに覆い包まれ子はすくすく育とうね
二〇二一年十一月一日

暗く沈む俯いてる藪を微かに暖める
低い空の向こうで遠くを見てる赤みを見付け
そしたら軽く息も吐けて何でも言えるけれど
許されるのは一言だけで
だって何でも言えるのなら一言で済むからね
闇を抑え込んでるような藪の上っ面に
柔らかく匍うように掠める赤みに楽しく酔うように
そっと選ばれて舌を滑らかに呟きは転がったろうか
生きる喜び…
違うかも知れないし違うと思いたいし言い直したい
だって生きる喜び…なんて言ったって何も起きない
そして取り返しが付かないのを伝えられるみたいに
藪から空へ赤みが増して行くけれど何処から何処へ
な何処から何処へも無くに赤みは墜ちて行くらしい
その赤へ墜ちて行く身
その赤へ昇って行く身
それとも身も赤も回ってくるりと越えられたのかな

そうして
昇る赤へ墜ちて行く身
きっとそうだ
だってもう赤みは藪の闇へ溶け
低い空も赤みを追って藪へ墜ち
昇る赤へ墜ちて行く身なんて有り得ないだろうから
有り得ない身へと墜ちて行く墜ちる赤みに染まる身
これが一言だけを許された果ての眺めなんだろうか
な眺めなんて溶かしたいなら疾っくに溶けてようね
だって
有り得ない身へと墜ちて行く身は先に溶けてようし
生きる喜び…は跡形も無く失われ
そうか　許されてた一言だけって
失われるべきものを言い当てる為に与えられたんだ
その替わりに
昇るも墜ちるもなく身は赤と真っ直ぐ一つに結ばれ
それはその通りに始めは赤と一つだったと知らされ
生きる喜びなんて生きる妨げでしかないと知らされ

赤と一つなら生きる妨げでさえ無かろう
そしたら生きるだけが何処から何処へだろうと
空の向こうの遠くも直ぐ近くへ息付いて
継がれる息は何処まで繋がろうかに眺め渡され
二〇二一年十一月二日

足元の泥が動いてる
堪らず離れた処へ埋めたくなるけれど
泥の漏れる器しか見当たらない
そんな器に泥を満たして埋めたにしろ
漏れた泥がその離れた処を滑らせ
離れた処をすっかり押し流し
離れた処だった筈の埋めた処は直ぐそこで
ぽつんと残った泥の漏れる器を覗いても
空っぽとも泥で満たされてるとも見えないなんて
何故だろう

泥なんて触った事も無かったんだ
そう知れるにしろ
さて何処から遣り直そうかなって顧みるに
泥が何かさえも知らなくて
そしたらもう
凄く見晴らしの利く抜け道を滑り降りてて
その凄い速さで滑り降りてるのって
泥の漏れる器から漏れてる泥の他に無かろうな
って喉まで出掛かってるのを呑み込んで
でも呑み込んだりしちゃいけなかったのかな
それを吐き出せてたら泥が何かを知れたかな
吐き出せないから泥が何かも知れないのかな
な事にしろ
さて何処から遣り直そうかなって顧みるに
何が泥か知りたくさえもなくなって
泥の漏れる器の底の割れ目しか見当たらないよ
そんなの幾ら内から外から覗いてもなぞっても
何時の間にか滑り降りてた筈の抜け道は逸れて

足元で泥が動いてる
いや確かにそうとも知れないけれど
堪らず離れた処へ埋めたくなるのは何だろうか
二〇二一年十一月三日

足りないのは弱さだって分かっては居るし
折に触れ弱さに勉めては来た積もりだし
努めて弱さを追い掛けても居るけれど
そうして蹌踉けながら音もない霞のような藪に踏み込めても
忽ち藪を荒荒しく踏み付ける足しかないとは
蹌踉けてたようでただ猛り立ってて
足の向きを斜め前後ろに忙しく動かして回ってるって
そんなの全く
軽弾みにも要りもしない力が激しく湧いて出て
行く手を妨げるものをぶち抜いてるだけでしかないよ
その先ではわくわくと楽しい虚ろさが濃く青く鋭い影を躍らせ

向きが定まらないのは今にも獲物に飛び掛かろうって構えだね
どうしてこうなって仕舞うのか
あぁ弱い足と
その足の弱さに傷付いて已まない
自ら立ち上がろうとも出来ない弱い体が欲しい
そんな弱い体に弱弱しく心も折れていじけて俯いて
足元ばかりをぼんやり見詰めるようにするのがやっとで
見詰めてもぼんやりじゃ見る目の弱い光りも消え入りそうで
その光りを守る術も無ければ目を塞ぐか覆うしかなく
そんな力も足らないでは目を弱く閉じようとするしかなく
閉じる力さえ足らなくて薄目をうっすら開けてるしかなくては
膝はのろのろと折れてふわりと倒れ込むしかない足元の直ぐ間近の
凝っとそうして居なければ見えて来ない
僅かに微かに静かにささやかに傷ましく病んで傷だらけな
名も無いのは誰からも痛ましく見過ごされてるからの
そこに苦しげに掠れ声で呻いて動けない儘に
どれ程に影が薄くても失せようにも失せられない
それより毀せもしない程に小さく内へだけ丸まって

丸くもなれずに尖って尖りも出来ずに少しだけ波打つ
弱さとは何かにすら思い至れず何事に依らなくても弱い儘の
内へだけ遠く遥かへ延びて続く
うっかりそれを見過ごせば強過ぎる光りが全てを焼き尽くそう
そんな弱い限りに弱い光りを必ず探し出そうとしてる
涙も涸らし痛くて青白く血の引いた目は開いた儘に
心の内にさえ留まれずに知らず流れ出す
何処までも失われて已まずに失われない弱さに縋って
消えるようにもその弱さが直隠して隠せない
露わに晒されるおぞましい限りの弱さの醜さに打ち拉がれて居たい
二〇二一年十一月四日

チクチクと厚ぼったいんだよ
棘の有る赤い花弁を重ねに重ねて頬張ってるかなって
何時しか棘が生えて出た丸丸と平べったい舌を幾つも
舌の上で転がしてるんだとしたら

どっちが舌の
舌ってどんなだっけって
って吐き出したくても
喉の奥が弓形に引っ張られ目玉の裏へ刺さりたいかに痛いだけで
なら歯でそろそろ噛み切って
下唇だけゆるゆる拡げてペッて吐き出して出て来たのは
舌とも違うし
棘の有る花弁に似てはいるけれど触れも出来なくて
だったら舌で味見しようかなとか少し戯けて
の舌ってどんなだっけ
喉の奥も目玉の裏も真っ赤な生温い空っぽが脹らんで
脹らみばかりみたいなら
どんなだっけの舌も生えてるようで生えてなかったかなとか
そんな生えてなかったかな舌を見てみたくて
吐き出そうとすると吐き出せて仕舞うけれど
それって歯でそろそろ噛み切ってペッて吐き出したそれで
それとも下唇の使い方を誤って吐き出し方を間違えたかで
今吐き出したそれとさっき吐き出したそれを見間違えてるだけかで

まだもう一つ触れるなら触れられそうなものでも吐き出せそうかに
喉の奥が目玉の裏を撫でるように冷たく重く突き上がると曲がって
その曲がるのってさっき吐き出したそれにそっくりで
ならまだ何も吐き出せてなかったか
まさか口の外の腹の中へとぐるり一回りに吐き出してたとか
な腹など見当たらないなら腹ごと吐き出してるのかも知れないけれど
腹なんて何処かから盗んで来て後からくっつけるとかどうでもなろう
だってもう喉の奥から目玉の裏へと吐き出せそうなものは閊えに閊え
押し戻すしかないなってぐるぐる回って回り過ぎて
さっき吐き出したそれにそっくりとまるで違ってるよ
そんなの回り過ぎて重過ぎて脹れ過ぎて吐き出せる筈も無く
あぁこれが舌であろうとなかろうと
ぶくぶくと瘤だらけかに硬くざらざらと太った
棘の有る赤い花弁の血を含むだけ含んだ成れの果てならなって
叫びたくてせめて喉を震わせて呻けたかどうか
喉の奥から生えて曲がりたがってる舌は棘を生やせずに喉を詰まらせ
喉の奥は独り野太い棘かに突き上がって目玉の裏に尖る棘を探しては
目玉の裏なんてツルツルしてるだけさ

だって棘の有る赤い花弁そっくりな舌を根刮ぎごっくりと呑み込んで
脹らませるだけ脹らませて内から裏返したのが喉の奥だからね
だなんて身動き取れずにも嘯いて態と周りを全て敵に回せば
吐き出すも吐き出さないも舌の上をざらりと転がせてそうで
な根刮ぎにされて厚く窄んだ舌の痕こそツルツルし過ぎてて
棘の有る赤い花弁の舌を貪り喰いたくてウズウズしてそうで
二〇二一年十一月五日

水の埋め方さえ教わってたら
石を転がせとか星を読めとか扇で風を送れとか
嗄れた尖った声に隙なく取り囲まれ
諫められたりせずに済んだんだろうにな
彼らもそれは教わってなくて喚き立てるしか無かったのかな
ふと水を湛える眺めに立ち止まり
それは蛇も膚を光らせ逃げ出す暗がりでしかないんだけれど
目を向けると

影が消えるように誰も居なくなる
誰も居なくなるのは構わなくても
水を湛える眺めと暗がりが溶けて斑に混ざり合って
水に近付こうにも足は竦んで
水の眺めは逃げるように消え
蛇達の乾いた砂を匍い戻る音しか聞こえないのでは
それに耳を塞ぐべきか澄ますべきかも
石を転がすか星を読むか扇の風に尋ねるかしかないみたいで
でも石も星も扇もギラギラと目を傷める作り事に過ぎなくて
何処に水が埋まってるかだけをひたすら探したくなって
でも足が冷たくて
あぁ足の冷たさなんかに心を懸けるなんて
もう取り返しは付かないよって突き放されてるみたいで
足元を掘れば孰れ水は湧き出すよなんて嘘に背を向けようにも
抑も足元からして嘘ではね
と
水が来てる
石を手繰ってる

星の謎を全て知ってる
扇の風に震えてるかは分からなくても
それは体が冷え切ってるせいじゃないとは分かってる
その体の埋め方なら教わらなくても
水を埋めるようにも埋められそうで
でも膚を光らす蛇だらけの闇に埋もれるのがやっとかな
水を湛える眺めに押し流されて行くような
首は出して
二〇二一年十一月六日

そこが底かどうか
狭くて身動き取れないなら
そこはまだ底じゃない
底が抜けるような底だったらそこはまだ底じゃないんだな
そこでは抜けても抜けてもまた底が抜けて底へは行き着けない
なので底へばかりしか動けなくて狭くて身動き取れないって訳で

思い通りに思いっ切り軽軽しくどっちへだって動けるなら
そこが底でそこで底が抜ける事もなく
そんな底では一時も凝っとしてられなくて
思い通りに思いっ切り軽軽しく動き回るのも已められないよ
そこが底の困ったところで
動き回るばかりじゃ向きも定められなくて
裸で放り出されて藻掻いてるみたいなもんで
そんな底ならいっそ浮かび上がるしかないんじゃないかって
軽いだけ軽い言葉を口から出任せに吐いて吐いて溢れさせ
それに溺れるように惑わされれば惑わされる程に
浮かび上がりたいけれど浮かび上がればはしなくても
向きだけは定められたんだって惑わされる儘に心も定め
真っ直ぐそっちへ浮き上がれそうかに突っ走って行くと
何も無い！
何も無いって
これ程に心を迷わし惑わす処も無いよ　おぉ恐っ
そう心の底から思い知らされたなら真っ逆様に迷い惑い極まって
さてそこへ

その何も無い！の底なしへ墜ちて行けようか
な底もないようでは
と言うか
そんな底もないので底なしに迷い惑い極まって行けての何も無いかな
いや
でもそんな何も無いでは何も無いのでも無いんじゃないかな
何も無いと言うならただ何も無くて何も無いしか無いんだよ
それを
何も無い程に心は迷い惑うだなんて
それが心の迷いで惑いだなんて言いくるめようったって
何も無いには程遠い訳で
とは言えそんな何も無い程遠い処など有る筈も無かろう
有ったところで知れる筈も無かろうなら
何も無いはやっぱり何も無いんじゃ無いんだアハハって
それで迷い惑う心を失うのなら
そこが底かどうか
そこが底なら
軽いだけ軽い言葉を口から出任せに吐いて吐いて溢れさせ

その儘に凝っとしてられようか
裸で放り出されて藻掻いてるみたいなもんでも
二〇二一年十一月七日

獣のような
但し脚の無い裸の言葉を連ねていたに違いなかった
拗らせていた積もりが俯いて墜ちそうに真っ直ぐに
それが微かな掠り傷にぬるりと触れようとしていた
のぬるりがぬるりとしか分からなくては何なのか
ぬるり独りで言葉も傷もぬるりに溶かして消して
奥へと独りぬるりを脹らし円く拡げて行くけれど
それは言葉を連ねた向きとも傷の向きとも違って
頑なに真上と真下を半ばずつ向いて口を開け
誰も居ないのを確かめてからのように
花から搾ったのと同じ毒を
池のように口に溜め

その青い毒を口から溢れさせるのは裸の姿の他にない
言葉の裸のような脚の無い獣の青より青く生白い裸の
でも何が足らないのか毒を嫌うのか裸は遣って来ない
光りが足らないからさ
と毒は裸の獣の声をうっかり聞いて仕舞っては
裸の獣は遣って来てても姿が見えないだけだと知れて
殺すしかない
殺して屍の姿を晒させるしかない
殺したのか
殺したのなら毒は祈るかのように
でも屍では裸より裸で裸に過ぎる
それでは膚は生きてると見紛うかに毒をぬるりぬるりと吸って
今にも毒の池を冷たい儘に愈愈冷たい体で泳ぎ回り始めそうに
失った脚を背を丸め池の底を隈無く探し回りたそうに
大きく開けた口を真上と真下へ半ばずつ向けて
噎せ返るように言葉が吐かれるのなら
獣のように何事もなかろう
但し丸裸のように裸までも忘れて

裸まで忘れるなど生白い脚を生やしてさえ有ってはならなくに
二〇二一年十一月八日

どうにもならない過ちでは
どうにかしないではどうにもならないけれど
どうにも独りではどうにもならなければ
どうにかそれを誰かになすり付けなければなと
罪はそうして考え出されたようだけれど
これが何とも使い勝手が良過ぎて
罪のなすり合いは賑やかに花盛り
どんな祭りも能く能く見れば罪を盛り立てる祭りで
様様な罪を巡って祭られるのも罪で
そのど真ん中の罪はと見れば隠されてて
だって罪なんて初めから空っぽで
だって過ちを誰かになすり付けるだけの事だものね
でもその空っぽが何とも使い勝手が良くて

誰が誰へも思う儘になすり付けられるんだから
誰へ誰がなすり付けてるか見分けが付かなくなって
罪はそんななすり合いから離れた処に
罪は罪だけで厳かに煌めいたりすれば
誰の誰に及んだ過ちもその罪を借りて来て
どうもしなくてもどうにでも済まされそうじゃないか
罪を憎んで人を憎まず！　とはおぞましい
罪なんて空っぽなものを憎める筈など無かろうに
罪は皆で楽しく祭られてだけ罪なのに
とは言え皆それを知ってるからこそ
どうにもならない過ちから真っ先に
そんな罪の祭りの罪に罪をなすり付けてようかね
でもそんなで済ませて良いのかなぁ
それこそどうにもならない過ちじゃないのかなぁ
罪なんて初めから空っぽないんちきじゃないかぁ
だなんてうっかり糾そうならそれこそ許しがたい
厳かなんて罪を辱め傷付ける筋金入りの罪だぞぉって
どんな祭りにも入れて貰えず

いや　だったらそれは罪とは違うし過ちとも違う
もっとずっと穢らわしい獣のような振る舞いにされて
そりゃそうだ
だって獣は罪を知らないからね
どうにもならない過ちも独りでなんとかしてるからね
二〇二一年十一月九日

口は一つしかないのはもうそう決まってるけれど
でもそれは
出口へ入って行くのか
入り口へ出て行くのか
これももうこの二つしかなくて
でもどっちかに決まってるかは決まってないのかも知れず
どっちでもかも知れないけれど
どっちでもないって事はないな
どっちでもなくたって何となく

口のこっちから向こうへ口の中を通って行けそうだけれど
そんなの口が許す筈がないよね
だってそんなの許せるならそれはただの抜け穴だろうしね
じゃ口って何　が
その
出口へ入って行くのか
入り口へ出て行くのか
それともどっちでもか
な訳で
これはもう予めどれと当たりを付けたってどうせ当てずっぽうなら
そんな行き当たりばったりじゃ必ず間違えるって分かってそうでも
取り敢えず遣ってみるしかない
ならもう遣ってみてるよ確りと
で答えが分かったかと言うと分かったにしろ分からないような
で必ず間違えて仕舞ってるなら答えなんて何の使い途もなくて
つまり口って何　の口も何も何でもなくて
ただ必ず間違えながらに
遣れる事を遣るしかないって事が一つしかなかったって事で

そんな一つを受け容れるから必ず間違えるしかなくなる訳で
にしろ
て事は
何の口も口など無かったみたいに跡形なく塞がれては
再び何処へとも何処からとも出るも入るも
もう無いよって事なんだけどね
その一つには逆らえずに
二〇二一年十一月十日

ずっと
物乞いの旅をして来てるんじゃないかって
心付いて仕舞いそうだけれどそれってどうなのかもどうも
心は取り敢えず凍り付かせるしかなくに
目はさも弱げに暈かし晴れた日の鮮やかな眺めも翳ませて
脚だけはぼちぼちと止める訳にも行かず
そんな足元の土埃になら目は冴え冴えと

でももうずっと
こんな歩き方をして来てるんじゃないかって
心付いて仕舞いそうならまた心を凍り付かせ
な心が
凍り付いてばかりに居られもなくに動くのは
物を乞いたい他にはしたい事もなさそうなら
やっぱりそうかって心付く心に嵌まるだけで
それは避けたいなと避けられる処を探しては
辿り着けたなら辿り着けたのがそんなここで
そっくりな二人が密かに会って同じ声で囁く
その影を遠くから直ぐ側に眺めて立ち去る心
その心を心が追えて物乞いの旅も終わろうか
に
な心は
追えない心に心を失いもう心でも無くなれば
入れ替わるかに密かに会ってた二人の企んだ
新しい旅の山が燃え森が流れ河が裂けるかな
晴れ渡る空も易易と突き破る静けさに満ちて

波打って拡がって尽きない眺めに攫われよう
二〇二一年十一月十一日

広い眺めに
風を探そうにも
風は時を道連れに消え去り
衝き上がる暗い空が湿りに湿り
はち切れて墜ちそうに円円と高いせいで
自ずと濡れる枯れ草の目立つ草原の道は細く
拗っていたのがまた身を潜める蛇のように曲がり拗り
彷徨うようにその道を辿るしかないなら明明とくっきりと
見渡す限りを差し迫るように見晴るかされても
頭を垂れうろうろと迷うしかなかろうかな
そんな目でこそ見付けらよう
遠く掠れた狼煙かの
空の暗さを際立たせて淡くふらふらと浮き立つ狭く短い虹を掠めて

黒い砂粒を装ってる積もりらしい
昼の星が独り
煌めくなら
それは風に連れ去られた時の甦る印だろうかと思えてならないのは
時は何処へも戻れないとどうにも分かってならないからで
草葉の陰で歯軋りしてよう音まで聞こえる時の
その悔しさに花環でも捧げたいけれど
草原に花の時も終わっていっては
替わりにあの昼の星を
撃って落として餞とするしかなかろうに
星は先を読んでもうそっと虹の裏へ転げ込んで隠れて息を止め
風だけは徐に背を撫でて温く甦ろうかに
帰る先ならまだ
重たげに虹を目指し抗うように続いて行くよね
二〇二一年十一月十二日

昨日も夜明けから佇んで
庭で何かを願っていたか
昇ったばかりの陽を逃れるように弓形な影を引いて舞う
小鳥の額の滑るように照り輝く狭い青に問われてようか
余りに風は止まり過ぎて
それは恐ろしく激しい風を高い空に見せたがってようか
風はきっと真上から真下へ真下から真上へ吹いてようか
海まで降りて横たわる尾根の眺めを聳え立たせたいかに
何かなんて何だって構わない
叶わないそれへ敢えて挑むように
距てられ繋がらない時と時を串刺しの串かに貫くように
青い額の彼は
飛び立った巣も帰らなければならない巣も知らない儘に
何処へでも逃げ果せたいとしか願わずに
尖った翼を陽が昇りも沈みもしない北へ向け
冷え切る身の陽も届かない冷たさに身を溶かし心も消そうと
いや
身も心も疾っくに冷え切ってよう

それでも溶けるも消えるも為らず
なので風を切る翼は愈愈鋭く尖り
真上から真下へ真下から真上へ吹く風の向きさえ断ち切ろう
空の至る処にそんな風の切れっ端は
とは言え果てなく広そうなそれらは
組み合わさり崩れたりして恨めしそうに彼を見送るしかない
庭で何を願おうと求められるものが願われた事など無いかに
二〇二一年十一月十三日

誰も受け取らない手紙を懐に
溺れそうにも胸苦しく
高く繁る草を掻き分け
草原を抜けた直ぐ先に
白い道がぐるぐる回っていては
血は嫌でも鳴り騒ごう
勢いで手紙は受け渡されたけれど

手紙を銜え今にもむしゃむしゃ喰いそうなのは
傷だらけの丸丸と大柄な古びた色の嘴で
長旅に疲れた身を晒すと喰われているのはこの身にしても
骨はばらばらにされ疲れも取れよう
勢いで骨身を届けに出向くけれど
白い道がぐるぐる回っていては
血は嫌でも鳴り騒ごう
勢いで骨身は受け渡されたけれど
受け取るのはぐるぐるの真ん中に違いなく
受け渡されたのが
肉色を滲ます嘴にすっかり喰われ
血も吸い尽くされたろう身と来ては
ぐるぐるの真ん中の白い身と一つに溶けて
勢いで手紙を送り返しに行くけれど
受け取るのがその一つ身では何事も恙なく済まされ
後はばらばらにされた骨を取り返すだけかと戻ると
白い道がぐるぐる回っていては
血は嫌でも鳴り騒ごう

勢いで嘴は白い骨を整えるけれど
骨だけで踊れようか
虚しく騒ぐ血塗れの
誰も受け取らない手紙を懐に
二〇二一年十一月十四日

見えないものなら知ってるし知ってる通りに色色言えても
見えるものは見える程に少しも知れなくて
知れない通りに色色言えて言う程に息を詰まらせる位なら
何も言わないに超した事はないと知れても
何か言ってなくちゃならないのは知れない通りに見えても
知れない儘を何とかしないでは居られずに
見えてるなら何とか出来る筈だって思い込みに縋り付いて
それには言い続けるしかないって思い込み
息はまた詰まるけれど見えるものを見えなくする術もなく
知れない通りに見えれば見える程に見えて

いやそれで何が見えてるだろう
知れない通りに見えてる程
何も見えてないのでは
だって
色色言えて仕舞えるのは知れないで見えてるからで
それって
見えないものを知ってる通りに言うのとはまるで違って
色色言える儘に色色見えてるその色色の色を色に見てるだけで
でも見えるなんてそんな事で
そんな事で言える事なんて知れてて
知れてるとしか知れないならそれより知れようもなくて
それは息も詰まるよね
何も見えてないのでは　とか疑って仕舞う程に
あぁ見えるものなんて何で見えて仕舞うんだろう
それこそ少しも知れないんだから
それこそ息も詰まるよね
そんな事で息の詰まる事なんて知れてて
知れてるとしか知れないならそれより知れようもなくて

そうか
それで見えて仕舞えばどうにも見えなくはならないんだ
って少しも知れないならそう思い込むしかないんだって
思い込みに縋り付いて
それには言い続けるしかないなって思い込み
息はまた詰まるけれど何とか息を継げるのは
見えないものなら知ってるし知ってる通りに色色言えるからかな
二〇二一年十一月十五日

どう見せるかに決まりは無いぞ
なのでどう見せないかにもな
それが君の言いたい事らしい
そんな事を言いたくて蛇なんだろう
でも見ての通りの善い奴で
脅して来たり況して噛み付いたりなんてしない
疾っくに冷たくなって息もしてなさそうに

身が腐らないのは偶偶巧く冷やされてるだけかも
でもそれってきっと困った事だよ君
どう見せるも見せないも決まりは無いって
それで凍りそうな死んだ振りかよ
こっちは言い逃げされて放り出されたみたいだよ
これじゃ何も決められない
それとも決めるとも無しに何だって決められる
決められてるようで決められてないに違いなく
これじゃ何も見えて見えない
それって脅されて噛み付かれてるようなもんだよ君
そんな事をしたくて蛇なんだろう
見ての通りの善い奴なんて影も形もないよ
じゃ君は何奴って質したくても
何も見えて見えない後ろにでも身を潜め
だったらこっちはその居処を突き止めたくなるよ
見えて見えないなんて後回しで構わないとか思い込んで
必ず君の首根っこを掴まえて遣るからなとか
危ないって分かってても

噛み付かれるよりもっと酷い事になりそうでも
いや
そんな危ない酷い処で酷い事になってる姿が見えるなら
見えて見えないの奥で蜷局を巻いて微睡んでる
君の首根っこなら掴まえられたかは知れないけれど
こっちはこっちで
どう見せて見せないかの有りもしない決まりに
蛇のように絡めてそうじゃないか　ねぇ
君
君君
二〇二一年十一月十六日

罵る声が
その声を罵る
罵る声は黙り込んで張り裂ける
その声に潰されて罵られた声では

高い声を戦くかに張り上げるにしても
黙る声が
その声を黙らせて
高い声は何処もが声で満たされるまでに裂かれ窮まり
もう声は罵りようもないのか
黙る声が
黙る声を刺し貫いて
その声に繰り返し圧し被さり
もう声は黙りも出来ず途切れに途切れ失われたと
嘆く声も無いなら
呟く声の怒りを含もう
その声も失われ
その声を罵って已まないかの
罵る声に似せて似せ過ぎて
何の声も突き抜けて
酷い声だけがさも喚くかな黙りを決め込んで
どう声が酷いかに声が声に黙って耳を欹てるようなら
高い声が底の抜けたように低く劈き

低い声が空を越えるように高く轟き
でも声は高くへも低くへも失われた儘な姿の逃げ去るようで
違う声が微かに洩れ
何の声とも違うかに
なら声では少しも無かろうか
その声でも声ならどうにも声なのかと耐え難いかに
罵る声を挙げたくて
呻き声にもならずに
無い声をそれでも罵りたいなら
無い声など黙らせて
罵る声に変えようと
黙る声さえ切り裂いて叫ばせ
無い声に届かせるかにも
もう声なんてそうして彷徨い迷うのがやっとで
掠れ声でさえ無かろうさと蔑まれるばかりに
再び声を挙げたいと望みようもないのなら
何の声からも見放されようか
罵る声は

二〇二一年十一月十七日

↓黙り（だんま）りを決め…

形有る物がどれも空っぽなのは
空っぽでないと形を失うからで
でも一つだけ遺り方が残ってて
空っぽな物でも木の根元へ埋め
甘い水を流し込んで満たすなら
その水の形には物の形は定まり
時は止まり時の向こうが翳れば
木より向こうは影に沈んで闇で
闇はどれ程に満たされてようか
その計り知れなさを前にすれば
どんな物も空っぽだろうけれど
そんな事に思い耽り楽しいのは
木の根元には甘い水が満たされ
そうして空っぽな心も充たされ

闇の奥を覗いても脚は竦まずに
木陰で酒盛りだって出来そうで
止めた時に孕まれ産まれる筈の
形有る命に望みは脹らむからで
あぁその形は
沸き返る水が計り知れない闇の奥を満たして行こう形で
水が涸れ海の底は乾上がり罅割れ塩が噴き出す眺めまで
その形は呼び出すだろうけれど
動き始める時に確り語らせよう
形有る限り命も必ず空っぽだと
木は高く根が深いのもその為で
もしもその木が伐られたなら
水は闇を破って押し流し
何の形も失われよう
そう知ってての
空っぽだよ
二〇二一年十一月十八日

そう広くもないのにその庭には何でも揃ってて
庭の南の端に陽を斜めに背に黒くざらざらと濡れた岩が突き出てて
庭へ踏み入る度に必ずその前は通らなくちゃいけない
その岩を刳り貫いた中に首飾りが飾ってあって
首飾りを手に取りたくても手前に小さな泉が湧いて近寄れない
それとも疾っくに首飾りは無くなってて
刳り貫かれた中はもやもやと薄汚いなら
日頃から思い描いてる儘な穢れなく白い首飾りを拵え
それを岩の暗がりの真ん中へ煌めくように飾りたかったのかな
きっとどっちでもない
なので暇を見付けては浜へ降り
首飾りに相応しい貝殻を拾い集めてはいたけれど
貝殻はばらばらな儘でちっとも首飾りにならないどころか
ばらばらに散らばるばかりでは
一つ一つの貝殻はもう恐ろしく距たり
でもどの貝殻からも目が離せず

貝殻と貝殻の距たりからも目が離せず
それで目は何処までも拡がって行くにしろ
見えるのは距たり散らばるのを已めない貝殻ばかりで
そんなでは必ず目を傷め
何もかも真っ平らで真っ白にしか見えなくなったら
きっと貝殻も遠ざかるのを已め
そしたら杖を突いて懐かしい一つ一つを拾いに行って戻って来よう
そんな杖が欲しくて
刳り貫かれた岩の暗がりに何時も目を遣っていたに違いない
その杖を
昔誰かが
刳り貫かれた岩の前で突き立てたかな
それで泉は湧き出したとかね
そんな杖でなら
泉を跨いでも行けそうで
二〇二一年十一月十九日

緩い上り坂に敷き詰められているのは
隙なく切り貼りされた
粘粘と柔らかい夢の欠片ばかりかなと
陽を浴び取り取りに輝くそれらに惹き寄せられるからは
蜘蛛で
それとも
蛇で
どっちにしろ
脚が生えてるか生えてないかの事ならどっちでも良いし
脚を捥がれた蜘蛛とその脚を突き刺された蛇でも良いし
陽の差し方によっては蜘蛛でも蛇でも無くて構わなくて
だって
緩い上り坂は落とし主の知れない汚れた指輪の円みだし
夢なんてその円みが捻曲げられそうな恐れでしかないし
その恐れに蜘蛛でも蛇でも絡もうなら賑やかで楽しくて
な事より
敷き詰められた夢の欠片に脚など有っちゃいけないのに

生えたのか突き刺されたのか至る処で脚が突き立ち蠢き
夢などすっかり数知れない脚に埋もれ円みも恐れも失い
な事にしても
陽は傾き日向と日蔭の境目もぼやけ夢など絶えようかと
夢を操る時を隠した過ちを認めるかに自ら捩れる指輪は
蜘蛛の脚を生やす蛇の身で這って辛うじて坂を登り切り
陽は落ち
捩れに捩れても一繋がりを強いられて深い傷を負う夢が
縋れる何も無く何の助けも得られず転げ回る速さを増し
円みに至り着こうにも指輪の落とし主への恨みに阻まれ
なら
蛇の脚を生やして蜘蛛ならどうかなと
生やしては切ってよう
使えない脚の欠片を取り散らかしては
二〇二一年十一月二十日

聞かずに済む事は
聞かずに済ませて済ませなよって聞かされてたかな
な事も聞かずに済ませられたなら聞かずにも済んだかな
もう済んだ事だけどね
足音が怖いのは何故かは調べようがないよ
何故って
それを怖くて逃げてしかそれは耳に届かないから
いや
耳に届いてなんてないよね
もし届いてたら怖さにどろどろ塞がれ耳は奥まで血塗れさ
足音だけは
聞かずに済ませて必ず済ませなくちゃいけないんだ
な事なら聞かされるまでもなく知ってたけどね
な足音なので
例えばそれは
鈴の鳴る音で済ませ
熱い鉄が打たれる音で済ませ
土が掠れ声を上げる音で済ませ

で後が続かないのは
土が掠れ声を上げる音って
すっかり足音なんじゃないかって
怖さが忍び寄って来てそうだからで
いや
そんな事が怖さなら怖さなんて知れてよう
土が掠れ声を上げる音なんて
足音とは違うどころか聞いた事もなかろう
聞いた事がないのが災いして
聞かずに済まそうも済ませられようかって
足音の怖さなんて剥ぎ取られ
血塗れに塞がれようにも塞がれずに裸の耳を晒すしかないんじゃ
音の鏡に映る裸の耳を映す鏡に映る裸の耳に映る鏡みたいな音に
鏡に映る裸の耳ばかりを見せられて裸の音を鏡に映る鏡みたいに
えぇっとそれって
音を聞くのとも違う事なんじゃないかって
なら聞かずに済ませても何も済ませられず
土が掠れ声を上げるのを聞くも聞かないも

裸の耳を映す鏡に音を聞くしかない裸の耳が裸の音を追う足音に
鏡の耳は耳を塞げず怖さに塞がれ血塗れで
二〇二一年十一月二十一日

言い伝えも書き残されず忘れられた
大きな古い木は親しげに
繁る枝をゆったり揺らし
晴れても曇っても濃く深い影を脹らませてる
でも
その木の直ぐ向こうは晴れも曇りもせず
陽を受けた事のない白っぽい道が冷え冷えと横切り
人の足は何時も絶えていては
その先の眺めは知らない儘に
体を赤く塗り女の着るような薄衣を纏い
その古い木に辿り着くまでの全ての眺めを忘れ去り
男に執濃く追い縋って殺された女

それとも
男に果たし合いを挑み殺された女
屍にどれ程の違いもなかろう
きっと名も同じだったりする
その屍の積もりで足をふらつかせゆるりと舞い踊って
それからその若者は死に顔をしてた通りに早息は絶えて
屍を畳み甕に入れ穴を掘って埋めたのは私に違いない
時を経て
言い伝えの古い書き置きが見付かり
禍禍しい木の謂われは疎まれ憎まれ
陽を受けた事のない白っぽい道の向こうへ植え替えで
根を掘り起こすと口と口を塞ぎ合う甕が二つ見付かり
骨を納めてない甕はぼーと音を立てそうにも空っぽで
殺された女の弱り果てた声もその空っぽへなら甦ろう
なんて甘く思い耽るのも私だけに違いなかろうけれど
陽を受けた事のない白っぽい道から
体を赤く塗り女の着るような薄衣を纏って
空っぽな甕を覗きに来て直ぐに帰ったのは

死に顔はしてたにしても男でも女でも無く
舞い踊る後ろ姿の陽を受けず冷え冷えとも
植え替え先へ嬉しそうに木を導いてそうで
ふと振り返る若い顔に差す私の面影もふわりと赤らみ
二〇二一年十一月二十二日

思った事を
喋った積もりなら
何処へでも行けるけれど
（何処へでも行けたって何処へでも行けただけで
何も少しも楽しくないけどね）
喋った事を
思った積もりなら
穴に嵌まって何処へも行けなくなってるよ
（何処へも行けなくたって何処へも行けないだけで
楽しくないなんて事はないけどね）

でも
そうして穴に嵌まるのが病み付きじゃ
喋って喋って
思った積もりの事の儘を思い返し憶え込み積み上げ
心は幾らでも重そうに深そうに面白そうに富み潤い
事は全て巧く運んでるよなんて思うのが落とし穴で
（と言っても疾っくに穴に嵌まってる訳だけど）
出来る事と言ったら
喋って喋って
喋った事を
思った積もりなら
その積もりばかりを浮き浮きと
心に楽しく積み上げて
知らぬ間に心は狭くなるばかり
その狭ければ狭い程に
喋って喋って
まだ喋り足らなくて
そんなで何処まで行くのかなって言ったら

（何処へ行くも行かないもないんだけどね）
口は磨り減り喉は潰れ声は嗄れ果て
それでも何も思わないよりは何か思ってようって
喋ろう喋ろうって
喋ろうって事を
思った積もりでも
舌が縺れ息は詰まり閊えた喉の奥は火を噴くようで
穴の中で火に包まれのたうち回るかな勢いで
もんどり打って何処へでも飛び出して行ける積もりになれたなら
もう嵌まってられる穴も埋め尽くされ心は無いも同じに狭過ぎて
それは何処へでも行けるけれど
（何処へでも行けたって何処へでも行けただけで
何も少しも楽しくないけどね）
二〇二一年十一月二十三日

誰が掘ったか知ってるみたいに

池の深さなら知ってる
夜が池を招いたらしく
夜が深さを測ったかに
池が夜に縋ったのか
夜が池に求めたのか
池の深さは夜の深さとぴったりで
僅かでも違えられてると知れれば
夜は根刮ぎ吹っ飛ばされてようか
なので夜に抜かりはなく
なので夜へも池へも行き着けなくて
行けども行けども曲がって傾くばかりな白く柔らかな道を
ずるずると戻って滑って止まらない
行けども行けどもが間違ってそうだけれど
曲がって傾くばかりから転げ落ちない為に
行くのを已める訳には行かないと怯えてる
頼れるのは怯えの他にはないと怯えにも怯える
池を覗けたら夜の深さの怯えを測れようか
ずるずる戻るのは何処へなのか池は遠い儘

何時怯えを失い怯えに見放されるか知れず
夜とは違う時の縁をぐるぐると経巡ってる
それともただ
遣り方が違うだけなんだろうか
その
池とも夜とも
縋ったとも求めたとも
曲がってばかりとも傾くばかりとも
何の深さとも
生きるとも生きないとも
なら
夜を背に池の底へ潜って行くのは誰かとか
そんな事らも元から知らされてなかろうか
白く柔らかな道の裏側を辿れてるみたいに
裏返ったずるずるぐるぐるを掘り昇るかに
戻ると違う戻り方で何処へ戻るまでも無く
怯えると違う怯え方だけを探し出せなくて
二〇二一年十一月二十四日

呼び声には答えないので
呼び声の已んだ事はない
夕べの帰り道でだけの互いに名乗りもしない友と帰る野道を
黙りを決め込み呼び声を遣り過ごす
夕闇の遠い思い出までを覗けるなら
年を数え飽きるより遥かに旧くから
な幾ら旧くからだろうと
今も耳に呼び声は疼くように新しい
そう新しく聞けて生きて行けるんだ
重くても帰れる足さえ止めないなら
そう確かめるのを怠ったりはしない
そして
陽を映して真っ赤な川の向こう岸の
高く繁る藪の奥で待ってる旧い友の
痩せて濡れた身を震わせて蹲る姿が思い浮かぶ度に

眠り扱ける幼子の眉根を寄せる直向きさにも劣らず
野道の果ての火の色を疲れた目で睨み緊く口を噤む
で友よ
いや
そっちの友じゃなく夕べの友へ呼び掛けて
遠い火の色が近付くに連れ
どれ程の恵みを分かち合えるかに就いて
競うように語り合えば
あの呼び声への疼きは嘘のように消え
でもそれは
共に幼子の二人が肩を寄せ息を揃えて眠っていた
暗く冷たく火の色も届かない狭い窪みの思い出へ
すっかり戻ってどう遣り直しが利くか利かないか
微睡みの縁を辿り有りもしない答えを弄ろうかと
微かにも消えないもっと旧くてずっと新しい疼きへ繋げられ
二〇二一年十一月二十五日

何時も通りな朝曇りの道の傍らで
錆びたような嗄れ声で真心を試される
そんなものの有った例しはないよな
水の中に斃れて俯せに浮かぶ真似がやっとの答えだけれど
曇り空を仰いで踏み堪え
錆びたような目でぬらりと笑みを湛え
錆を剥がすような声で応えさえすれば
試された真心に叶ってるって訳だ　チッ
さて道は行き止まって
深く突き刺さってるらしいその大きな石は
誰にも動かせないばかりに謎扱いだけれど
泡のような穴が幾つか開いていて
間近で覗くように見上げると曇り空を透かせ
円く閉ざされた曇り空が七つばかり重なり合い
その七つをギリギリ巧く貫いて曇り空を透かせば
青空へも昇って行けそうじゃないか
さて暫く経って

謎が解けたのか石は跡形無く取り去られ
底知れない尖った穴だけが覗き込めるけれど
錆びたような匂いが鼻を突いて立ち上り
あぁこの匂いは嗅ぎ覚えが有るぞと思い出すと
右目と左目と口と耳の穴が二つに下の穴が二つで七つ
鼻の穴は痺れて塞がれ数に入らない
その七つの匂いを泡を並べるように巧く透かせ繋げば
それに貫かれる身は匂いと立ち上るように
青空へも昇って行けそうじゃないか
それには先ずは
穴へ落ちて大きな謎の石に成らないとな
でも
水の中に斃れて俯せに浮かぶ真似しか出来ないんじゃどうしよう
曇り空の海も錆びたような匂いを立ててたろうか
錆びたような嗄れ声は暗い浜辺で招いてたろうか
二〇二一年十一月二十六日

剥き出しの泥が耐え難いな
泥の匂いが人より人臭く
慣れる程に胸を衝かれ
同じ匂いがこの身からも込み上げるのではね
人が草原に水を引いて草原を腐らせ
男も女も競って腐った草原をのたうち回り
それで泥が造られたのは見たかに知っているけれど
計り知れない人の血と肉と骨がばらばらになって
泥に混ざり込んでる話しは子供騙しかに嘘臭い
何もかも嘘かも知れない
泥の匂いが人臭いのも泥より人より嘘臭い
でこの身の匂いを嗅ぎたいところだけれど
乾き切って石より硬く青黒い下り坂の道を
誰よりも先を急ぎ風に逆らって降りて行く
振り返ったら怖いぞ
泥で拵えた同じ形の人の群れが迫ってるし
風など幾ら切っても足は少しも進まないし

下り続ける坂道は見掛けより酷く狭いんだ
泥色の拡がる真っ只中を突っ切って行くよ
溜まりに溜まった泥には常に真水が張られ
水の匂いで泥の匂いは抑えられてそうでも
足を踏み外せば泥の中へ真っ逆様に決まってるよな
そしたら何が起こるんだろう
全く何も思い浮かばないけれど
何も思い浮かばなければ何も起きないとも分かって来て
泥の匂いも人の匂いも水の匂いまでも風の真後ろへ忘れ去られ
それでもまだ坂を急ぎ下る人の血と肉と骨はもうばらばらで
振り返ったら怖いぞ
とか堪らない程に嬉しそうに独りで喚き立て
今にも泥に成れそうに何時までも泥に成れずに
血と肉と骨もばらばらな儘に何処へも飛び散らず
孰れは石より硬く青黒く乾き切って
声を失う間際に
あぁ嘘臭さの何て人臭さ！
泥臭さなんて目じゃないぜアハハとか喚き納め

嘘臭さざらざらな
初めから後ろも先も
嘘かも知れなかった下り坂に磨り潰されて行けるかな
二〇二一年十一月二十七日　↓形（なり）

唇がひらひらと
山の風に舞って落ちて行くのは
脹れる厚みを血のように青く艶めかせる木の葉
だなんて考えて
木の葉に命を預けてられたのは
唇の鈍過ぎる動きを
酷く速くにしか読めてなかったからで
風を拒んだ森に代わって唇が
その深く繁った罪を悔いる声を聴き取れては
青の揺らめきは限りなく黒に近い
と言うより青は

黒の底を薄い刃のように波打って黒より濃い艶
だなんて考えて
森の罪に命を預けてられたのは
黒より濃い唇の青を
その艶が唇の動きにすばしこく煌めくかに
切れ目なく山の風に流して脅すような渦を巻かせ
これでもかって締め上げるように森を翳らせてたからで
でも
そんなの
黒より濃い青の艶の使い途としては間違ってよう
青は
墨のように練って固めて玉にして
その黒より濃く煌めく艶で
放って置けば脹れて悶えるしかない
苦し紛れな赤みさえ差す硬く閉じた分厚い唇を
すーと裂くように開いて命を流し込み
それを
ひらひらと

軽やかに山の風と戯れては舞ってられるように導いて
そしたら
浄められた血の薫りは森に遍く振り撒かれように
頑なに奥深い罪に隠る森も風を容れ拓かれように
二〇二一年十一月二十八日

独りだけ居たらしい血を分けた子は
剣を深く刺したように海へ突き出す
窓も一つの小さな黒塗りの家に居て
会いに行った事も無いなら会いに行かなければと
会いに行っても家は明るく空っぽで
明るいのは
海を向いた窓が漁り火の光りを採るばかりでもなさそうで
灯りも見当たらず壁が独りでに輝くでもないなら
壁にびっしり掛かっている
くねくねと有り得ないような形に様様に曲がる剣が

それぞれの光り方で周りを明るくしてるに違いない
窓から広広と見渡せる海もその周りの内で
数知れないくねくねと曲がる光りが海の底を這い回る
それを可笑く覗き込んで高い声で数え上げたりしてるのは
幼子に違いなかろうけれど
私の子なのか
私が子なのか
私の子が私なのか
私に子など居ないし
私は子だった事もないし
などと言ってみても
私と子しか居ないなら
私と子は
血を分けた話しが丸きり嘘であっても
互いに何かと何かでなければならない
それとも疾っくにそんな何かは無くし
それで光りは海の底へ逃げ込んで行く当てもなく
いや

光りはくねくねと曲がる事で
その悉くが挙って家の窓を覗き返し
壁にその同じ形の剣を飾ってよう
まるで見覚えの無い形ばかりでも
一つ位はと手に取れそうな剣を探す内に
うとうとと息絶え
そんな事には見向きもしない
初めから独りで家に居たその子は
暗い目をどんよりと瞠り黙って海の向こうへ出て行こう
二〇二一年十一月二十九日

上が前へ来て
下から後ろまでを突き抜き
右は踏み堪えたが燃え尽き
左は水が逸れて出て流され
そんな言葉らはもうどれも

言い換えるしかなかろうけれど
言葉など幾ら言い換えたところで
言うべき何をも奪われてるようなら
言うと言わないとが
喰うと喰われるとが入れ替わるように換わってて
言うは言わない
言わないは言う
言葉を喰う言葉は喰われ
言葉に喰われる言葉は喰う
いや
そんな言葉らももうどれも
言い換えるしかなかろうけれど
なかろうけれどなりにその言い換えも言い換えてたら
そんな言い換えなんて疾っくに何かに換えられてよう
なので
上が前へ来て
下から後ろまでを突き抜き
右は踏み堪えたが燃え尽き

左は水が逸れて出て流され
でも
な事らはそんな事らとは違う何かに換えられてるので
で何
なんて開き直りの言い草なら言い換えも要らないのか
何と問われたそれが指差す向こうを遙かに見下ろすと
家が燃えてる
もう帰る処は無いって事か
あの家は誰の家だったろう
思い出せなくも忘れた覚えも無ければ
始めから知らない家なのかも知れない
あぁ
知らない家なのに家とは知ってるなんて
知らない私なのに私とは知ってるんだよ
そんな言い換えにしろ疾っくに何かに換えられてよう
二〇二一年十一月三十日

十二月

白が塗り潰されて行き
白い丸が眺め渡され
縁を巡るしかなさそうなら道だろうけれど
足元に誰が棄てたか子供の屍に足を取られ
白く丸い夢が子を殺したのなら
その夢を殺さなければならない
その為には私も
先ずは夢に殺されなければならない
そんな夢なんて有りはしない
でっち上げに決まってる
でも夢をでっち上げたのもその夢で
なので白く丸くなって
きっと誰でも構わない

殺さなければならない
なので私は子を見殺しにするしかなかったし
その夢を殺しに行かなければ夢も救われない
その為には私も
先ずは夢に殺されなければならない
そんな夢しか有りはしない
にしても
まだ足元の子供の屍に足を取られる儘で
白い丸がぬるぬると脹れて行くばかりを
どうにも出来ず丸の縁の縁へ追い遣られ
でも足元を見るとぬるぬるに呑まれたに違いない
屍の姿は無く
呑まれた子と同じ道を潜り抜けて来たに違いない
真っ黒な鳥が白の縁を破って羽搏けば
丸を丸ごと砕き白を何処までも追い詰めるように弾き飛ばす
そんな鳥なんて遣って来たりはしない
でっち上げに決まってる
でも

何処までも失われた白が流した血で
何処までも真っ赤に染まったのなら
遙かに届けばすっかり透けて
その血煙は夢の匂いも失せた
谷間に立ち昇るあの空色の煙
二〇二一年十二月一日

さて夢から醒めると
が夢から醒める夢でしかない
と夢を蹴散らすと
その夢を蹴散らす夢を遥かに見下ろしては
夢の空を飛んでいる夢を見た話しを
これは正夢だからちゃんと聞けよ
と言われてる夢を見てるにしても
夢はそんな夢らを蹴散らし
夢の話しと言われた夢が少しも夢な

筈もなしに語られたところに依ると
その夢は夢男を遥か下に見下ろし
その夢男は
凡そ夢でしてはならない事を遣らかす
夢の岬の火を守る友を殺す
皮を剥いで被り友の振りをする
友の屍は岬の火で焼き灰は潮に流す
他の誰もが夢さえ見ずに眠り扱ける夜に
それを見下ろし大声で思わず友の名を呼ぶと
名を呼ばれた夢男が紛れもなく殺された友で
そんな夢男な友では殺すしかない
で殺した
殺した
始めから夢など見ていない
語られる夢の話しなどない
屍だけが有って片付けなくちゃいけない
誰も殺されてないかに
で

殺した友の皮を剥いで被ると
透かさず彼は夢へ墜ちて行くけれど
誰だろう
彼と友だった事は無いどころか全く見知らぬ奴だ
彼に夢を踏み躙られた事なら有ったかも知れない
いや　だからね
始めから夢など見ていないんだよ
正夢でさえも
来る日も来る日も何もかもが
見知らぬ男の皮を被る見知らぬ奴に踏み躙られてるし
って夢を蹴散らせるなら全て蹴散らせて
でもそれで良かったのかな
岬の火も夢ごと失われては何もかもが甦るなら正夢で
二〇二一年十二月二日

逃げようと思った時には

もう時は止まってるんだけど
時が止まっては逃げる他に出来る事は無いし
でも時が止まっては逃げられない
逃げられないから逃げるしかない
これが
時が動いて何時でも逃げられるなら
逃げるまでもなく
なので幾ら逃げようとしたところで
逃げるが何か分からなくて逃げられないよね
もし分かって逃げたにしても
逃げなかったのと違う処へ行けるでもないし
はそうなんだけど
もう時は止まってて
時が動いてた時の逃げられたかどうかは済んだ事で
で
ただここに凝っとしてるしかないなら
こうしてるだけで果たして逃げられるものかどうか
を考えるしかない

考える事はそれだけで逃げる事なんだ！とか先走らずに
いや
凝っとしてるしかないなら先走る他に何が出来るだろう
先走る事が出来なくても先走ろうとは出来るだろう
それとも時が止まっては先走ろうとも出来ないかな
それとも
時が止まるも止まらないも
逃げるが何か分かるも分からないも
そんなのは知った事じゃなくに
ただ逃げようとしてるだけなんじゃないか
と分かれば
決まって時は止まるしかなくに
二〇二一年十二月三日

埃臭い唾の一塊をつるりと呑めば
溶ける目を緊く閉じた鼠の骸でも吐きたくなる

それとも
鼠の骸を吐いたので
埃臭い唾の塊が次次に湧くのを
急いで呑まずには口から溢れそうで
でも鼠の骸はずっと先に
濡れた上り坂を矢印みたいに指し示してるなら
唾など口から溢れさせるに任せよう
鼠の骸の形に指を曲げて伸ばして
その指し示すのに順って坂の上を覗くと
つるりと赤い指先を
じろりと見返す顔の
滑るように坂を這い下る白い蛇の目付きなら
女で
それとも女の皮を被った男で
それとも女の皮の上に男の皮を被った女で
それともその上にまた女の皮を被った男で
連なり重なる女男女男：の目付きに狙い澄まされ
つるりと赤い指先は怯えるように震えて定まらず

直ぐに恋い死ぬか
酔って崖を駆け下り身をばらばらに砕いて死ぬか
迫られてるに違いないなら泥塗れに坂を上り切り
じろりの顔に
埃臭い唾の塊を吐ける限りに吐きたくなるけれど
女男女男…の已まない連なり重なりに
押し被せられるように身は妨げられては
もう上りも下りも知れない坂は崩れてだらだらと
鼠の骸の形にまたどう指を曲げて伸ばし直そうと
じろりの顔が
それでもまだ女男女男…の皮を被るのを已めずに
いや違う
じろりの顔は
女男女男…の皮を脱いで脱いで脱ぐのを已めずに
つるりと赤い指先とそっくりに
つるりと赤い指先とつるりと向き合えば
だらだらだらなりにも坂はどうにか持ち直そうけれど
まだ鼠の骸を吐き忘れた儘だと思えてならなくて

何一つ片付いてない
また鼠の骸かにごわごわと濡れて重い
口から溢れそうな埃臭い呑めそうもない唾の塊を
喉を拡げ傾けて滑り込ませてみるしかなかろうな
二〇二一年十二月四日

苦しんでるのか
それはそんな息遣いに聞こえて来て
鳥を獲りたかった訳じゃないと知らされ
籠の鳥を置きっ放して走れば
見付かりそうで見付からない
見付からない中に身は躍り込ませ
後は心の儘に探すだけで
まだ探してない処ばかりは次次に見付かる
そこへまた身を躍り込ませれば
その度に新しい苦しんでるかな息遣いは聞き直せてるようで

耳に届くその新しさにまた身は弾むけれど
どうやら見付かるのは
そんな何も見付からない新しさだけで
でもそんな何も見付からない新しさが
見付け直される度に新しく見付け直されてるのも確かで
その新しさだけを何処までも追い求めて
見付けたぞ！　新しく何も見付からない新しさを
とか声は抑えて黙って叫び続けてないか
あぁその新しい新しさを絶えず新しく見出せて已まない身は
その度に新しい苦しんでるかな息遣いに息を弾ませてないか
でもこれじゃ違うに決まってるんだ
苦しんでるかな　じゃなく
心の儘にただ苦しんでるだけなんだ
幾ら叫び続けようと声も出せてないじゃないか
そんなお前が籠の鳥なんだよ
なんて話しには騙されないぞ
籠は疾っくに破られ風に転げ鳥は風任せに飛び去ったろう
影もない

その影もないの新しさを追えば何処までも新しい息は弾む
でも心の儘な苦しみに果てがない筈はない
見付けたぞ！　そんな心の儘な苦しさを
ハッ　そんな筈こそ無かろうさ
そんな苦しさは見付からなくて
その見付からなさばかりが新しくて
そんな新しさばかりが已まないんだ
そんな新しいばかりな息遣いがお前なんだよ
なんて話しには騙されないぞ
だってもう苦しんでるかな息遣いなんて聞こえなくて
新しく何も見付からない新しさこそが影もなく
まだ探してない処から目を逸らせられはしないけれど
それはそれ一つに手の中で息を弾ませ愛おしい
二〇二一年十二月五日

この世を二人で分け合った筈なのに

石畳の道を行く一人の背中を追って
二人はふらふらと付いて行くだけで
その背中の落とす影が俄に薄くなり
石畳の淡い灰色に溶け掛けてやっと
その影が裂け目でも走らせたろうか
道は黒い石畳と白い石畳に分かれたかと思うと砕けて崩れ
背中は俯せに倒れ速い息を詰まらせ
追い付いた二人に後を託すどころか
次次に訳の分からない頼み事を唱え
それを違えて聞き取った
それとも聞きそびれた二人は
それぞれ黒と白の下り坂を切り拓きながら転げ落ちて行く
この世の果てまでをぐるりと一巡りしなければ
再び二人は会えなかろうけれど
仮にそうして会えたにしても
目の色から何からすっかり黒と白に染まっては
擦れ違うしかなさそうで
それが何かの弾みで行き成りぶつかったりしたら

黒と白の影が足元に裂け目でも走らせ
裂け目に沿って灰色の石畳の道の延びて行くのを
眺められたりしてそれは儲け物だろうけれど
灰色の石畳を挟んで
この世は黒と白に分かれた儘
向かい合う事も無く背を向けるばかりに違いない
でもそれで
あの一人の背中の二人それぞれに託された頼み事が
すっかり叶えられたのだとしたらどうだろうか
二人は黒いこの世にも白いこの世にも飽き足らず
背を向け合うそれぞれのこの世を離れ
互いの黒と白に馴れるまで抱き合えば
あの背中の影を追うように石畳を進み
その先のこの世の果ては黒いか白いか
黒白を付けるまでは楽しく語らえよう
それともその黒白が付けられるまでは
頼み事は何一つ叶えられてないのかな
二〇二一年十二月六日

欲しいのなら毟り取れよ
同じ事を繰り返せるのは
少しずつ近付いてるからのようでも
始めから直ぐ傍らに事は果たされて
だってほら
日日腹を満たす赤紫の薔薇の実の残り一つは
熟れ切って逃げ切れず日の終わりを映してる
何一つ遣り直せなくてしか事は遂げられない
強い奴から殺されるなら弱さが取り柄で生き延びられよう
尤も弱さを押し通そうとしても命は危うく
躊躇う弱さにぐずぐずと拘って戦いに飽き
殺されるしかない奴の強さに哀れを懸けて
そしたらほら
手の届かなかった石も拾えて
動かせなかった石も退けられよう

石は来た道を振り返らせてくれて
行く道さえ示してくれようね
遣り方さえ間違えなければね
何一つ遣り直せない事だけを
遣り直さずに遣り続けないと
必ず悲しまずに
悲しみを押し通す強さが遣り直させて仕舞うんだ
欲しいのなら毟り取れよ
事は果たされてるんだよ
二〇二一年十二月七日

鈍色の着古しを着歩ける若さよ
艶艶と肩を怒らせ裸を晒し歩く老いなど蔑んで
来る夜も来る夜も見上げる度に
それはやっぱり冴え冴えと晴れ渡ろうね
そこは誰と出逢おうと冷え冷えと煌めき

でも月影を象るかな白い鳥に戦いを挑まれては
受けて立つしかない儘に徒に時は過ぎて
それはそうだろう
白い鳥なんて全く
月影で象られただけのものだもの
それを知るには獣のような四つん這いも厭わず
当て処ないにも当ては有るかに裸を晒し歩いて
いや
それは違うだろう
白い鳥なんて全く
月影で象られただけのものだもの
徒に過ぎる時など始めから切って捨てろよ
そうして時の失せた切り口を覗き込むんだ
時が失せてはその長さも短さもなくて
覗き込む誰の姿も映さない深みの闇の奥を
絶え間なく満ち欠けを繰り返す月が
水底を這い回る蛇のような影を引き
古びも新しくもならず若さも老いも知らないで

誰の眠りでもない深過ぎる眠りとぴたり重なり
僅かなぶれも狂いもなく
今にも消えそうに小さく
その小ささで時の外に身を沈め
何が有ろうとも音もなく息付いて独り和み安らい
月の色も光りも褪せて透き通るだけの姿を見付け
その透ける内に微かな翳りの差して揺らめくまで
凝っとそれを見詰め続けられたなら
その翳りは
時の失せた中を覗く儘に覗き已む時も逃した儘の
己の姿を映す影だ
そしたらもう
その翳りを目指し
時の失せた中へ躍り込み
時を切って捨てた同じ潔さでその影を切り刻めば
己も切って捨てられよう
二〇二一年十二月八日

醜く長い陽を嘲笑って走ってたっけ
速く短い日に狼狽えながら
もっと声を延ばせよと朗らかに怒鳴られて
君らが何処へ消えようと知った事か
だって君らは顔を見合わせれば
君らの外の君らの中に居るじゃないか
あの賑やかな日の儘に
あの日の限りに
引き摺り下ろされた陽は
ぶよぶよと屑になるまで引き摺り回されて
笑いの渦にもっと急げよと駆り立てられ
誰が選ばれたかは
誰が疑おうと疑いはなく
な誰なんて何処？
見回す程に見当たらないなら笑いも失せ
取り立てて急ぐまでもなく

でもあの日の限りを今また考えてみれば
それは稀に見る時だったよ
私に私は疑われるしかないのなら
私が居なくなれば疑いは晴れようか
山の川が鳴り響くのを已めないように
水音に見下ろされ逃れられないように
襤褸屑の陽だけは残されたかどうか
暮れない儘な道の辺に立って
行く道の絶える先の薄明るさしか目に映らず
速く短い日に狼狽えもせず
二〇二一年十二月九日

高い木に凝っと見詰められ
身動きの取れないみたいに
考えなくちゃいけない事の
その儘を見付けて仕舞った

予め決められてた日取りを告げられたみたいに
直さなくちゃいけない事は山程有った筈なのに
あんなのはどれも口先だけの出任せだったのか
何処へ移り住もうかなんて企ても立ち消えては
行く道の絶える先の薄明るささえ
果たして眺められてようかも覚束なく
で何の話しだっけ
女が男を引き摺り込もうと騒ぎ出すなら
子を攫われたとか
どうせそんな事だろ
先に子を亡くしてる男なら他の事を考えようね
女など知らぬ間に踏み付けてぺちゃんこにして
な話しじゃなく
いや
全くそんな話しやそれに絡み纏わるあれこれが
一塊にぐるぐると厚ぼったく転げ脹らんで
枝葉の影までも深く刻もうなら
今にも自らの重みで潰れそうな高い木とそっくりで

その姿に真下に見下ろされ見詰められ
くらくらと目も眩む程に凝っと固まって
で何の話しだっけ
な何の話しも無いって事だろ
考えなくちゃいけない事のその儘って
と
幼子の泣く声が高くから降り掛かって来る
梢の囁きかとも
空耳に違いなかろうけれど
耳の奥深くまで刺さるなら
考えなくちゃいけない事のその儘って
疾っくに幼子に考え抜かれ
古くから答えはその泣き声に違いなかろうかと
見上げる睫毛に淡雪かに白く輝いて降り積もり
答えはしんしんと暗みを増し
空耳も凍るかに重みを弥増し
冷え切った耳の奥の重みは全くこの身の重みで
幼子を抱くように丸まる儘を

そっと暗みに墜ちるように嬉しがれたら
高い木の根元に埋もれて眠りたいらしい
考えるなら他の事で
二〇二一年十二月十日

白と白を取り替えても白と白
黒と黒を取り替えても黒と黒
白と黒なら取り替えて黒と白
そこで
有るものと無いものとが取り替えられたら
一人が丸儲けで
もう一人が丸損
白と黒の
どっちが有ってどっちが無いか
白と黒が比べられるなら
取り替えは騙し合いで

白と黒がまるで違って比べられないなら
取り替えは賭けになる
とは言え勝ち負けは定め難い
丸儲けが勝ちとは限らず丸損が負けとも限らない
と言うか何が丸儲けで何が丸損かが定め難い
身と影とが取り替えられたとしよう
一人は身と身になり
もう一人は影と影になる
魂は影に宿るのなら
身と身は木偶二つと同じ
影と影が身の奪い合いで鎬を削っても
身と身は何もしないで寝てれば済むから楽なもの
影と影の争いにケリが付いても影が入れるのは身一つだけ
相討ちならどちらの影も消えて何も残らない
二つの身はまた違う二つの影でものんびり待ってさえ居れば
それで失うものは何も無い
とは言えそれで賭けに勝ったのだろうか
賭けに出たとさえ言えないのかも知れない

影と影の争いに敗れ
傷だらけで
どの身にも戻れず彷徨い続けるしかない魂だけが
有るとも無いとも黒白の付かない新たな自らを楽しんでいる
二〇二一年十二月十一日

甘い実は汚らしいので
花ばかりを食い歩いている
花は獣の糞の匂いが強いけれど
石を囓れば口に残るその臭みは消せる
石を探しに川原へ降りて行くと
川の水は海の深く濃い煌めきを
汚らしいもののように嫌っていて
川は出来れば硬い底を大きく裂いて
滝と落ちて消えたがっている
消えるには川底の裂け目は何処までも深く

滝は底無しでなければならない
どうやら
行き成り姿を消す川の先には水音一つしないのなら
そんな事だったようだ
石は全て底無しの滝へ流され
川原は濡れてつるりと足を滑らすしかない
囓る石が見付からなければ
口の中で花の獣の糞の匂いは腐って行こう
腐った臭みを消すには腐った花を頬張って
くちゃくちゃと噛み続けるしかなかろうけれど
石を無くした眺めを何処まで見通しても
花はどれも瑞瑞しく咲き続けるばかりで
腐った花なんて何処にも見当たらないし
試しに花を口に放り込んで噛んでみても
石のように硬く冷たくて獣の糞の匂いなど少しもしない
そうしてもう花は食えないなら
引き返して川の水の色でも食うしかなかろうか
しかし水の色など泡立ちもせず甘い実よりも甘そうに汚らしい

何の当ても無い儘に空きっ腹で川縁を遡って泉に辿り着き
透き通った泉の底を覗くと泡立ってはいて
泉が涸れる遥か行く末を凝っと待つように音も立てず
数知れない石が掻き回され花のように腐ろうとはしている
口に含めるのはもう水音しかなかろうかと慌てて目を上げると
目は酷く澄んで水音に限らず見るものの全てを腐らない儘にする
二〇二一年十二月十二日

風を向くなら南向きは何時もの事
風は必ず南からと知れてるので
それで風を向けるんだけどね
なので南を向きさえすれば
それで風を向いて南向き
南は浮かぶように深深と沈むように広広と
なので南は近寄る術もなく遠い儘
行き着ける筈もなく直ぐそこかに眺められ

なので眺めてられるのは南ばかり
西も東も凋んで消えて北は背に張り付く儘
それでなのかな
飛ぶ鳥を追えば何時も南向き
鳥は必ず南へ飛び去り還って来ない
鳥は南へだけは逃げられると知ってるんだ
それとも
ただ逃げたくて鳥になったからには
迷わず真っ直ぐ必ず翼を南へ向けて仕舞う
先に逝った鳥が待ってて呉れる訳じゃない
独りで逃げるしかなくなったのではない
南を目指す鳥になるしかなかったんだよね
なので南は近寄る術もなく遠い儘
行き着ける筈もなく直ぐそこかに眺められ
なので逃げて行けるのは南ばかり
必ず還って来ない為に鳥は南へ飛び去って
後に何が残るのかって？
それは何もかもが残ろうね

でなければ逃げ切れてない訳で
それとも一つだけ残して置けなかったものが有るだろうか
ただその一つから逃げたいばかりに
南を目指す鳥になるしかなかったのに
二〇二一年十二月十三日

松を焚けば必ず火は数えてよう
でも何を数えているか答えられようか
数えるんだから数じゃないの？
あぁそうかもね
他に言える何もなさそうで
にしろ　でないにしろ
火を焚けば
数えている何が何だろうと
火が数えるそれを数えられて恙なしかな
そんな

火が焚かれなければ岸辺は真っ暗で
誰が岸辺に泳ぎ着けようか
火を目指し
やっとの思いで岸へ上がれたとして
急いで火に飛び込みでもしない限り
火が数えるそれに呑まれて闇に消えるしかなかろうね
そもそも
真っ暗な岸辺に泳ぎ着いたか流れ着いて
始めに火を焚いたのは誰だろう
な誰にしろ
疾っくに火に飛び込んだか闇に消えてようなら
火と火が数えるそれは
それを数え
それは数えられて何をしたいのかな
二〇二一年十二月十四日

低くて手さえ届きそうでも
なだらかに奥を向く黒い山一つな眺めは
眺めてる内にまた低く沈みそうで
誰も行き着けない程に遠いような
な山の儘にもきっと窪んでよう
そんな山の頂な窪みの底かは
墨を溜めたかに黒く揺らめき
黒光りの綾から音が一粒転げたか
音の粒が丸く脹れる鈍い音がして
脹れた音に罅が入る鋭い音がして
音が音を裂く重く捩れた音が唸る
火もその音までも千切り飛ばすかな
火が爆ぜる音
何故火が爆ぜるのか
爆ぜるのが何故火なのか考えながら
な音を幾つまで数えたっけ
忘れたなら忘れるまで数えた
その忘れたら数だけの時は経って

な数だけは叢でかさこそ音を立て
見付けた落とし物かにそれを拾うと
爆ぜた火に刻まれた時が掌で転げてる
時を食わなければ腹は満たされない
時を食わなければ命だって繋げない
分かってるけれど数が危う過ぎる
この掌の時をこの儘に呑み込めば
きっと時は腹の中で数だけ爆ぜて
腹は腸を飛び散らせ命は無かろう
と
手が滑って時は
山の頂な窪みの底かへと
命を危うくする音を立て
輪を描く水玉のように転げて行く
水玉のようなら水玉を覗くように覗けよう
な時の水玉の中に小さくも低くも明明と一つの火が
見晴るかそうかに見晴るかし損なう
その先に

窪み果てた山の山とは凡そ異なる
時など擦り抜ければ
重く脹れて已まない虚ろな姿の大きく塞がり懸かるのを
ぬらりと照らす
二〇二一年十二月十五日　↓腸（はらわた）

目の中に血を探す
血を搾る為に殺された鳥の血塗られた目と
目が合って仕舞ったようなので
な殺されたた鳥なんて何処？
口を利く鳥なら柱に吊されてたけれど
ずっと口を利きっぱなしで
あぁ喧しい
その瞠られた目は猛猛しく澄んで血走ってもなかった
それも昨日の事だろう
減らず口の鳥を見上げ柱を巡り輪になって踊っていた

それを眺めてたろうに
きっと血塗られた目で
その血を目の中に探す
それなら辻褄は合いそうだけれど何の辻褄かな
血と土を見間違えてたんだ
そんな辻褄なら合いそうだ
なら改めて目の中に土を探す
剥き出しの土に突き立てられた柱を巡って奴らは踊っていた
裸足で
裸足で踏み付けられた土から血の匂いが立ち昇るのを
どうにも出来ず凝っと見詰めるしかない目は
今にも血が流れそうに　血走って
裸足はどれも血塗れで
だって土は土な限り血で出来てるから
踊り回る程にそれを分かって奴らは土を踏み付け昂ぶって
あぁそんな土なら這い蹲ってでも口付けしたい
そんな土を黙って眺める目の中に改めて血を探す
な血なんて見付からなくて探す程に虚ろへ濁る目は

血走りも血塗られもせず猛猛しく澄んで瞠られ
涙の一雫にも劣る乾いた血の滓を目の縁に溜めるのがやっと
なのに
柱の周りはすっかり土塗れの血塗れに塗れ
それは土に肉は溶けて喜び勇む奴らの血だ
跳ね回る裸足だけが
目の中で躍る
二〇二一年十二月十六日

日日至る処
流れる水の叫びが鳴り渡る
渦巻くる痛みへの嘆き悲しみ
水は水なら水で有りたくて
閉じた闇に黙って冷やされ
果て知れない静けさに沈み
星の動きなど遥かに距てて

僅かにも震えた憶えもなく
その有る儘に
凝ったただ水で有りたくて
それが夢でしかないなら夢でもひたすらに絶えない夢で
まるで水は
その夢を容れる器かで
その夢を守り通す為に
火で造られた星の慣わしに従う辱めにも耐え
塞ぐ心は楽しめずにも
そんな惨めな成り行きで星の隅隅までを経巡るしかない
ただ強いられる儘に已まない苦しみに拉がれ
傾けられ断ち切られ繋げ直され降り注がされ
行けど戻れど叫んでばかりでは耐え切れずに
星の欠片の欠片の欠片の割れ目へ逃げ込んで
息吹く叫びを隠らせ水に似せた姿を生み繋ぎ
なので命の嘆きが水の悲しみに沿って洩れるのは
あれは水の夢が命の中を絶えず渦巻いてるからで
二〇二一年十二月十七日

疑いの始まりは影の端の綻び
でも危うさは喜びに満ちていて引き返せない
知ってたよ
初めから喜びは危うさに満ちていたからね
その喜びが疑われ
疑われる喜びなんて醒めた夢も同じで
危うさは危うさばかり
もう影の端の綻びじゃ済まなくて
逃げ切れるかどうかは成り行き任せだけれど
でもそんなの初めからで
なので危うさは喜びに満ちてたし
その危うさは初めから危うさばかりで危うさで
じゃ何処で間違えたのかな
影の端の綻びなんて初めから危うさの内で
引き返せないのも初めから危うさの内で

なら喜びなんて初めから要らなかったとか
喜びが疑われたのは初めから要らなかったからで
そうと分かればもう喜びを疑うのも要らない訳で
すると
疑いようのない静かな喜びが一つ湧いて来るようで
数知れない何の危うさも沈めて仕舞うようで
でもそうして喜び一つが満ちて行き
遠ざかる危うさを呼び戻せないのが危うさで
どうにも引き返せない
それこそが全くの危うさで
そうしてその危うさが隈無く喜び一つに満ちれば
喜びも危うさも忘れられ
綻びだらけで影の影も無い影の無い影と遊んでられて
でもそれが何の為の遊びかなんて尋ねちゃいけないよ
な事したら初めから遣り直さなくちゃいけないけれど
誰が遣り直すかなんて遣り直す誰かにさえ知れなくて
影もすっかり元通りなら遣り直し直してるとも知れなくて
と何を遣ってるか知れない儘ではきっと危ういのでは

とか
その誰かはそう真っ先に疑おうね
疑いの始まりは影の端の綻び
二〇二一年十二月十八日

海は何処に有るか
河が流れ込めば海かって海じゃない
潮が岬を掠めて海かって海じゃない
海と言うのなら海は作らなくちゃね
でも陸は何処も傾いてて海に向く処はない
力尽くで作ろうとしたか
海を引っ繰り返した痕なら見付かるけれど
なら河にも潮にも背を向けて
陸の向こうへ海に向く処を探し出そうにも
何処にそんな陸の向こうなんて見付かろう
昼の眺めは陸ばかりなら夜を待ち

星明かりは真上に高い星だけを残して隠し
真っ直ぐ真下に真下に覗く穴を覗き込めば
真上の星の姿は明るく平たく拡がって映り
穴に満ちる名を呼んで欲しそうじゃないか
でも海と呼ぶには何かが足らずに躊躇われ
夜の明けるのを待つしかなかろうか
夜は明けるのか
星明かりを隠されどっちが東かも知れずに
開けるも開けないもない夜が夜か知れずに
な夜明けを当て処なく待つのも虚しいなら
夜が夜か知れない夜に肖って
陸の向こうも向こうでないもない処へまで
足を止めなければ必ず行き着けようと進み
疲れて倒れて振り仰げば真上に一つ切りに
高い星は輝くも輝かないもなく
見付かるも見付からないもなく
な姿か姿でないかなその
真っ直ぐ真下に真下に覗く穴を覗き込めば

海は何処に有るか
な海なんて作らなくちゃいけないのか
な海の名を呼ばなくちゃいけないのか
海と言うのなら何処もが海じゃないか
な真下に覗く穴が覗けるも覗けないもないのなら
身は何処へとも潮に流されるも流されないもなくに
な身の奥に真下に覗く穴を覗き込めば
海と呼べるも呼べないもない海が映り
海で有るも無いもない儘に満ちてよう
二〇二一年十二月十九日　↓　陸（おか）

一つ切りの
生温かい土に埋もれ掛けた卵の殻の破れた夢から
二つ切りの
夢から生まれたばかりの夢が這い出して
二つの夢は

ただ隣り合い
憎み合うでも睦み合うでもなく
背き合うでも向き合うでもなく
時を同じくしながら
と言って少しも絡んだりせず
それぞれにまるで異なる姿を展べ拡げて行く
その二つの夢は
始めは一つだったのか
始めから二つだったのか
ずっと夢見る心に懸かれば
それもまた違う夢に違いなかろうから
三つの夢が一つの時の中を並んで進んでいたには違いなくて
夢の終わりでは
三つ目の夢だけが一つ切りに残って
始めの二つの夢の姿を甦らせようと
その掻き消された痕の破れ目を探り回り
物足らないにしろ夢の欠片は取り出せた
ようではあるがどうだろう

余りにも欠片過ぎて知らず余所から紛れ込んだとも疑われる
にしろ
一つ目の夢は舌を出していて
脹れ続ける舌は動き回る程に酷く重く
そのせいで仰向けの胸が赤く濡れて行く
二つ目の夢は明るくきびきびとしていて
子殺しと親殺しが殺し合う夢だが
どちらの殺し方も隙が無さ過ぎるのか
てきぱきした手捌きで
どちらも子でも親でも無い者を殺したかで
どちらも子でも親でも無くなって行くけれど
どちらにもそれは中中に困った事らしく
同じ一つの穴へ逃げ込むしかなくて
互いの殺し方を褒め合っているような貶し合っているような
穴が狭過ぎるせいか生温かいせいか二人は何時まで経っても
始めは子だったとも親だったとも互いを分かり合えない
三つ目の夢も二つの殺し方をはっきり見ていたのは確かで
それを思い出し鮮やかに甦らせられたなら

三つ目の夢が二つ目の夢へ入り込み
終わり掛けの夢を奥へ引き延ばして
一つ目の夢の赤い重みへまで溶けて行けるだろか
とろりと
殻は硬過ぎて割れそうにない卵に籠もる儘に
二〇二一年十二月二十日

生きていられるかどうかは
死なずにいられるかどうかに係っている
そんな事で善いのだろうか
何とか直したいものだ
などと思い立って仕舞えば逃げるしかない
何処へ？
の
取り敢えずはその何処へ？へ向かって
その為にはそんな事から逃げながらにも

生きていられなければならない
死なずにいられるかどうかには係わらずに
何それ？
などと考えたところで始まらないも何ももう始まっていて
つまり逃げるしかないなら逃げずにはいられずに
疾っくに逃げている
ただ逃げているだけだが
ただ逃げているだけで逃げられるでもないようなら
何をしているのか
逃げていられるのだから
それは何でも良いようなものかも知れないけれど
いや
疾っくに逃げても逃げ急いだばかりに
逃げる前の元の鞘に収まっていないとも限らないなら
花を食う
何時でも何処へでも花だけを探し歩いて花だけを食う
命がこの世に繋がれる限り花の絶える事も無かろうし
にしろ

花は果たしてあれは花だけで
生きているような生きていないような
そのようなものとして花は食われなければならない
少しも腹の足しなどでは無く
と言うか
死なずにいられるかどうかには係わらずに
生きていられなければならなくて花なのでは
そんな花ならば
花だけが花だけを食って花なのかも知れない
花の逃げる先は花だけで花は花と咲けよう
とも言えて
な事で
で
何処へ？へ向かっているなんてのは誰だろう
二〇二一年十二月二十一日

川には橋が架かって
けれど渡る為の橋じゃなく
川は渡れない
その替わり
川岸から眺める川は渡れよう
川岸から眺める川には橋は要らない
渡し舟から泳いででも渡れよう
けれどそんな川を渡っても
どの途戻って来られるか来られないかのどちらかなら
何を待つも待たないもなかろうかな
川の前に立つ
同じ川なのに何が違うだろう
何も違わない
違うと考えるのさえ儘ならない
試しに橋を渡ってみよう
試しに向こう岸へ泳ぎ着ける筈が溺れて流されてみよう
ほら同じじゃないか
渡れない橋をどう遣って渡るかって？

溺れて流された奴なら知ってるさ
いや
川の前に立つだけでもう
それよりは何を知れるも知れないもない程に
知れる限りは知れてよう
試しに川に背を向け
川なんて忘れてみよう
ほらやっぱり同じじゃないか
でも忘れらようもなかったら
それともうっかりとも忘れ損なったりしたら
それは大違いだろうけれどね
な大違いはどれ程な違いか知りたくて
また違う川の前に立とうかと辿り着ける川にはきっと
橋も架からず
川を眺められる川岸さえ削り取られてよう
二〇二一年十二月二十二日

爪を磨り減らすのは
丘の真っ直ぐな道の日毎の上り下りで
足元を見詰めながらなら辛うじて道も
見上げれば崖を攀じ登るのかとも
下りは足元を見詰めてれば
風を切って滑り降りられる
うっかりとも見下ろしたりなんてせずに
どう間違ったって
だって間違った奴らはどうなったかって
怖くて目を逸らすしかないからね
で
風を切り損なったか
うっかり足元から目を切ったようなら
道は失せ
真っ逆様に転げ落ちる崖を見下ろすしかなかろうに
長い時を掛けて爪を磨り減らしたせいか
足はまるで使えないにしろ

手は
爪を磨り減らすだけ磨り減らさなければ掴めない
その手を鏡に映したような手を掴み
指と指のふわふわと絡む内に
切り立つ丘の眺めごと空までも
（濡れても渇いても夜の空も昼の空も）
きっと重さに耐え切れないのだろう崖の底へ転げ落ち
丘の眺めの空までも剥がされたその痕の色めく傾きを
爪を磨り減らすだけ磨り減らした柔らかい足で
ふわふわと上っては行けて
でも空さえ失せ何処へも辿り着けないなら上るばかりな内に
それ切り時さえも磨り減らないのなら
爪を磨り減らした効も有ったろうかと
傾きをそっと顧みて覗き込まれる真下に
鏡を鏡に映したような影が崖の底で水を汲んで
水鏡に映る目が真上に見上げたいのは
女の奥が覗かれたような剥がされた丘の眺めの裏の色艶とも
二〇二一年十二月二十三日

水など嗅げば
水の匂いなど限りは知れず
な知れずに何処までも流されては
水に流されるより限りも知れず
知れない限りはゆるゆる熟れて
水の面を滑ったか
水の底へ沈んだのか
水など嗅げば
熟れた匂いなど限りは知れて
知れる限りな儘に流されては
知れる限りなんて高が知れてて
腐り果てたかにぬるぬる溶けて
水面の裏を滑ったか
水底の裏へ浸みたのか
水など嗅げば

何の匂いかも限りは知れず
な知れずに何時までも流されては
水に流されるより果ても知れず
思い煩う通りに行っては戻って
な
水など嗅ぐのは水ばかり
水を流れる芥さえ
心に懸かるのは温いか冷たいか
何を頼ろうか己の行く末ばかり
な
限りを知れるも知れないも
水は水の匂いを水に流し
惑わすような惑わされるような
水の匂いを水に流し流されて
ゆるゆるゆるもぬるぬるも匂いを籠めて遣り過ごし
身を低く沈める儘に押し黙り
水だけに許された
水の匂いの溢れ逆巻き濫れて已まない

過ぎた限りの時を一呑みに遡る時の来るのを
重い息を潜めて待ち焦がれている
そんな水など嗅げるのは
水の匂いばかり
二〇二一年十二月二十四日

衣を贈るように
日影を測って
その一差しを贈ろうか
男の女の姿から女の男の姿へなら
少しの狂いもなしに届けられよう
霞の野に降る儘に息は静かに乱れ
回り込む水に塞がれ行き泥んでも
その真っ白な眺めを断ち切れよう
鋭い刃の明明と煌めく姿を翳して
陽の志を秘めれば道を逆さに通し

けれども時は
何時の時も定められた時へ身を捧げ
命を測って凍るのを怠らない
ならば勇んで
日影の一差しを戯れ纏い
血肉も一振りに躍らせて
逆巻く水へなら時さえ砕かれようか
定めばかりは姿から姿へ生き延びて
二〇二一年十二月二十五日

何が欲しいかも心付かずに
何も置いてない店を探してるような
それらしい店も覗くだけで
だって誰も居ないのに
斜めに差し込む日影に
細かな埃が舞ってるばかりでは

で通りを曲がると酷く狭い店は北向きで
当たり前かに何も置いてない暗い中を
子供が店の奥へ逃げ込む姿は
招かれているようで
何が欲しいか思い出せと迫られているようで
左手に
水の匂いを籠もらせた手鏡を持ち歩いてるのを思い出した
覗くと
いや目が滑るように覗き損なうと
覗いてるのは店の奥の淡く青ずんだ扉一つない壁で
欲しいのは湖の真ん中を画いた絵だろうかと
そんな絵なら壁に掛かるのも見えて来そうで
緊く握り直した手鏡を覗くと
確りとただ真っ青で
これは湖の真ん中を覗き込めてるのかも知れないぞ
なら湖の底で子供の走り回る姿も透けて来ないかと
店の奥の壁を覗き直すと暗いばかりで
滑滑と真っ青な艶の床に目が行って

その湧き上がるような水の匂いだけれど
目を背けなければならないか
凝っと見詰めなければならないか
直ぐに決めなければ
手鏡に映る湖に身を投げなければならないかに危うく
絵を求めて店に入ろうと決めたけれど
耳を掠める呼び声に振り返ると（耳に残るその声は
声を上げられた喜びに恐れ戦くように震えていた）
誰も居ない道を隔てた南向きの何も置いてない店の中に
頭が大き過ぎるのに足が弱過ぎるらしい
転んでばかりに走り回る子供の姿が
陽を受けたり受けなかったりで消えたり現れたりして
これは目を背けなければと急いで目を背けたいけれど
背けようがなく逃げ込むように
ぐっと深く目を突き刺すように手鏡を覗き込むしかなく
目玉ばかり大きな頭の雄雌どちらでもある魚に見返されれ
どちらを向いても
いや

どちらを向こうにも向けない儘に湖の真ん中しか無くて
絵はまだ画かれていない
だってこれから画くんだから
でも誰が
と子供の姿を探さなければならないのか
間違っても探してはならないのか
直ぐに決めなければならないけれど決められなくて
手鏡に映る湖に身を投げた男の残した影が欲しかったんだ
二〇二一年十二月二十六日

薄っぺらに煌めく陽が止まろうと止まるまいと
土の匂いだけがしない拡げられた眺めを測れるのは
汚れる風の底を微かに浮いては滑ろうと
跳ねたい骨もふわふわ硬い
脚しかなくて
風任せで何処へでも測りに行けるけれど

あの坂は何処から上って来たのだろう
風は平たくしか吹かなくて
脚も坂を下りては行けない
見下ろす先へ見下ろす先へ
坂は何処まで下っても坂で
上って来たのは土色の膚の裸の若者で
掴んだ土を黙って秤に乗せ
坂の傾きを測れたら坂の長さも測れて
坂が何処でどう終わるかを見せてるらしい
この若者が丸っきり坂なんじゃないか
で
この若者は疾っくに殺されている
なので風さえ坂を吹き下ろして行けないんだ
そう心付けば若者を蹴倒し秤を踏み付け
脚は坂をぐんぐん下りて行ける
そうして
測っても測っても終わらない坂も
測れる処までは測れてるのも確かで

でもそんなの慰めになるのか
止まらない脚では後ろは振り返れずに
測れた坂の眺めは見渡せずに
坂はひょっとして下って行く先へばかりで
後ろには風が追い掛けて来るなら来るで
他には何も無くなってそうで
脚だって坂を測り続けて脚で
うっかり止まったら風に呑まれて消されそうで
て事は
疾っくにあの若者と入れ替わり殺されてる事になってるのかも
で殺されてる事と殺されてるのと何が違うのかな
あの若者が坂のその丸っきりな若者が殺され
その坂を測り続けて終わりが無くては
殺されてる事か殺されてるかを測り続け
ただそれっ切りで終わりに終われない訳で
それとも脚が止まらないのは
土の匂いのしない風が嫌なだけかな
二〇二一年十二月二十七日

噂に惑わされて急ぎ足で
日盛りを時の中に見付けたい
な匂いだけ残して立ち去ったのは
誰
なんて尋ねそうになって
晴れた高い空も甦りそうでも
頑なに池を巡る時は追い付けずに
誰
は誰かな儘に時に攫われ
影も陽も急ぎ後を追ったのか
明るみは仄暗く暗みは仄明るくて
花
が絶えるのは少し惜しい
だって冬も来ないと耳を欹て
のろのろと時の止まる音を聞けば

花
の色なら淡い遠くに響き
踏まれた霜の匂いを揺らそう
そうして一つ尋ねなくてはならない事に行き当たる
何
なんて尋ねそうになって
ふわりと久しい時が来ては直ぐに失われ
そうして一つ限りな何の匂いも色も知らない眺めに行き当たる
何
は何かな儘に時に攫われ
明るみが暗みを広広と閉ざし
もう戻れない振り出しも遠退いて
二〇二一年十二月二十八日

離れて皆の中の独りに入る
そんな離れる前は皆から離れて独りだった

けれど
独りだけへは独りだけでは離れられなくて
それで独りだとしたら
独りは
独りに入れも独りから出られもせずに独り
な独りな儘に独りを顧みられるとして顧みると
独りから離れて独りで無いならそこに一人
誰でも無いなら誰でも構わない顔を一人で作った
な顔なんて独りで作れる筈無いもんなって顔で
独りから離れれば一人でも居られないかと
皆の中へ入って一人で
な一人なら
そんなで独り
な一人は堪らず
な一人に纏わり付くそんな独りを笑いのめし
身動ぎ一つ出来ない独りに一人背を向け
そしたら一人の向く先に独りなんて影も無く
独りって何だっけと思い返されもしない

ただ一人なだけで一人
な一人は一人の向く先へ進むしかなく
な一人の前に独りな影かでも掠めようと
どうせ帰りに何だか突き止めて遣るさって
影とも目に留めず
でも破れた影の
繕った縫い目に微かに血の匂いは嗅ぎ取って
それも帰りに何だか突き止めて遣るさって
先を急ぎ捨てて置いた筈が先回りされたか
山の裏から聞こえるように先を塞いで
それは一人と同じ高さに吊り下がり
あぁそれって
これより先は進めないぞって事か
なんて思ったも思わなかったも
ずるずると滑り墜ちるけれど
まさか独りな中へだったら
そんな独りも笑いのめし
一人しか居ないのなら

そんな一人を一人が笑いのめしたに違いなかろう
そんな行き止まりを笑いのめすしかないからね
血の匂いなんて何処へも戻れず帰る処だって
独りに知れてたも知れてなかったも同じに
二〇二一年十二月二十九日

必ず応えて呉れない声に
ふと呼び掛けられてるようで
応えて呉れない声に耳を澄ます
それを忘れた頃に
そんな事を繰り返して来た
とは思い出せるにしても
繰り返して来た
そんな時の事をまたも思い出してるなと思い出して
その繰り返しをまた繰り返してるとは分かるだけで
だって

必ず応えて呉れない声って何
その声に呼び掛けた覚えもないし
ならばどうしてその応えなど望めよう
と思い直すのも繰り返されてたと思い出されそうで
そんな済んだ事に拘ってどうなるもないだろうって
改めて耳を澄ませてみる
けれど
抑もこっちから呼び掛けてもなくて
だってどうしたら呼び掛けられるか知れなくて
なので応えて呉れなくて当たり前な
なのでそんなの声でもなくて
そんな声でもない声を声に準えでもしてるのか
そんな事で果たして耳を澄ませてるんだろうか
耳を澄ますって何
のべつ耳に入って来てる音をただ止めてみて
その先に何かが起こって欲しいなって
何も起きないのも分かってながらに
止めた音が止め切れずにまた耳に流れ込むまでの間

何もしないで居るだけなのでは
なのに
忘れた頃にふとそんな事が繰り返されて仕舞うのは
呼び掛けられもしないし
必ず応えても呉れない
そんなそれの声を
聞き取れないなら聞き取りたいと
耳は常から耳だけで耳を澄ませ
そんな耳の事を
忘れた頃に思い出さずには居られないからだろうか
二〇二一年十二月三十日

足りてるならきっと足らない
足らないならきっと足りてる
だけどきっと
少しもそんな事じゃなく

足りる足らないじゃ全く足りないんだ
なのに足りる足らないで行ったり来たりなのは
疾っくに何もかも足りてるのを
ほんの僅かにだけ耐え切れなくて
ほんの僅かなせいで耐え切れない儘で居るしかなくて
で居るしかないならきっとまるで足らないに違いない
に違いないと定まれば
弾んでだけは居られよう
弾むとも知らなくて
取り替えられてだけは居られよう
取り替えられてるとも知らなくて
なので足らない儘なばかりに
そうとも知れず弾んでは取り替えられ
ほんの僅かな耐え切れなさは掻き消され
ほんの僅かにも
耐え切れない覚えなどを顧みたりしないのが徒で
耐え切れない覚えは却って耐え切れなくなって
でもその耐え切れなさも

弾んでは取り替えられ掻き消されようけれど
でもそれは
ほんの僅かにだけでしかなく
そのせいで耐え切れない儘では居られず
だからって
耐え切れない覚えを取り去れたところで
ほんの僅かにだけでしかなく
残りの
取り去れなかった耐え切れない覚えはそれっ切りに
そうとも知れず弾んでは取り替えられ掻き消されよう
ほんの僅かにには
で
そうして
耐え切れない儘で
さて居られるか居られないか
だけどきっと
少しもそんな事じゃなく
二〇二一年十二月三十一日

片　２０２１

著者　u_

© 2022 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published